



クローズアップ山田人

心に
夢と希望と
誇りを灯しとも

「あの日」があったことで出会えた新しい未来があった。誰もが支えあって拓いてきた明日。
生まれ変わっていくふるさと。そこには未来からの風を受けて立つ新しい自分の姿もあった。
ひとりの思いや力はたとえ小さくても、踏み出す一步はきっと風を呼ぶ。大好きなまちを輝かせたい。
その光は必ず自分をも輝かせる。夢と目標に向かって歩き続けてきた「山田人」たちがいた。
思いは重なる。「三陸の海辺のまちに、この山田町に暮らすことが誇り」。
ひとつの灯火あかりは小さくても、その連なりが今、リアスの山海を明るく照らし出している。



医療チームの最前線基地となった旧山田南小学校（現 山田小学校）

クローズアップ
山田人 ①
Close-up YAMADA-JIN

教育の十年

子どもたちの心に寄り添いながら
もう一度、海と郷土の美しさを教える
山田人はこれからも海と生きていく

日常が激変したあの日から10年。教育の現場では「心のサポート・ケア」を最大テーマに子どもたちに寄り添い続けてきた。そして今、津波の記憶を次代へ伝える学習も始まった。海を正しく畏れるために。なによりも「海のまち・山田」で強く生きていくために。

▼ 混乱の中から復興を目指して

平成23年（2011）の春、三陸沿岸の学校は、いつものように卒業生を送り出し、在校生は進級し、そして新入生がやってくるいつもの春を迎えるはずだった。

しかし思ってもいなかった事態が起き、経験したことがない状況への対応に、誰もが追われることとなった。

津波——。「町が壊れる」「家を失う」「身近な人を亡くす」「父母が仕事を失う」「繰り返し流される津波の映像」——。一瞬にして日常を奪われ、生活が一変した。

大人たちでさえ過酷だった状況の中、子どもたちが抱えていた不安やストレスがいかに大きなものだったかは想像に難くない。

学校も混乱していた。町内9校の小学校のうち、船越小学校（以下、船越小）は校舎2階まで津波が浸水。避難所となった小学校も多く、5月まで被災者を受け入れ、その後は、山田南、織笠、大沢の各小学校の校庭には応急仮設住宅が建設された。

保護者たちも疲労していた、しかし、子どもたちが心に負ってしまった傷を癒やし、心に落ち着きを与えることができるのは、やはり大人たちだ。

津波の夢を繰り返し見る、もう海は見たくないという子どももいた。学校へ来ない、または来られない子どももいた。周囲に心配を掛けまいと健気に振る舞う子、いつも以上に気持ちがたかぶっている子もいた。

学校教育の現場では、そんな震災後の環境下で子どもたちと向き合っていくことになった。

もう一度「海の子らしさ」を取り戻したい。辛い災禍さえ次代へと伝えていける日が訪れることを願い、教員をはじめ現場関係者たちの協働による教育の復興を目指す取り組みが始められていった。

▼ 「心のサポート・ケア」がスタート

3月11日からの数日間、学校の状況はどうだったか。

「被災直後の学校は、まるで野戦病院のようでした」

そう語るのは、山田南小学校（以下、山田南小）の元校長・佐賀敏子さんだ。

「学校は、一時、1147人の方が避難されていました。そればかりではなく消防本部、病院、入院病棟、薬局も兼ねるような状況でした」

学校近くにあった後藤医院の後藤尚院長は、迫りくる津波を見て、病院スタッフと患者さんを連れて山田南小へ逃げ込んだ。幸い津波は医院に到達しなかったが、町職員の懇請を受けて

同校の保健室で避難者の診察を開始。翌日には町内の近藤医院院長近藤晃弘氏（整形外科）近藤藤勝則氏（内科）も活動に加わったほか、4日目ごろからは日本医師会災害医療チーム（JMAIT）や岩手医大、昭和大学、国立病院機構などの医師団が駐留し、小学校は避難所兼総合病院でもあった。

「励ましに訪れる方や報道関係者への対応もありました。保護者へ引き渡しができない児童もいて、余震におびえるのを励ましたり。そんな中、発電機や反射式ストーブを貸してくださいだったり児童のための食糧を支給していただいたりした保護者や地域の方々、食料の分配やトイレを流すための水汲みや清掃、多くの転出手続きなどに懸命に当たってくれた教職員の皆さんには頭が下がります」

ご家族を複数亡くして自身と子どもだけが毎晩のように学校を訪ねてきた保護者もいた。「教職員24名の中にも、家族を亡くされた方が2名、家が被災した方が7名もおりましたが、心を一つに子どもたちへの対応や避難所運営に当たってくれたのでした」

やがて学校再開のための段取りや学校運営計画、行事の作り直しも迫られる。臨時職員会議で職員同士が心を開いて話し合った結果、佐賀校長は「いちばん大切なことは子どもたちの心のサポート・ケアだ」と確信した。

山田南小では、長期計画「山田南小学校の取り組みとこれから」を提案。被災規模に鑑みて1〜2年での復興はありえないと考え、1年生

が卒業するまでの平成23年から29年までの「長期プラン」として第1期（平成23〜25年）を復興期、第2期（平成26〜27年）を復興期2、第3期（平成28〜29年）を復興期3と、3期に分けて設定。「心のサポート・ケア」を中心に据え、教育活動をも重点化しながら総合的に質を上げていくとの考えだった。

▼ 寄り添い、支える

町内の小学校の再開は4月20日、入学式は21日に行われた。

陸前高田市の前教育長で、発災当時、大沢小学校（以下、大沢小）の校長だった大久保裕明さんは「再開を視野に入れた準備を始めたのが4月1日でした。けれども学校に置かれた避難所も継続しなければいけない。私には、どちらかと言えば避難所運営の方が中心でした」と話す。

大沢小には別棟のカーペット敷き多目的教室があり、そちらが避難所に充てられていた。当時、教室が避難所となっていた学校もあった中、同校では再開に際しての動きはスムーズに進んだという。

「新年度には、親の引越しなどの都合で、児童約20名が転校するなどしました。もしかしたら、気付かないうちに友だちがいなくなっていたというケースもあったかもしれません」

子どもたちが知り得る情報は大人より少ない。知ったとしても理解や納得には時間もかかる。周辺で次々に起こる変化は、子どもたちに



混乱の中でも入学式には笑顔が(旧山田北小学校 平成23年4月)

とっても大きなストレスだった。「そんな状況の中でも、ひとつだけいいことがあります」と大久保さん。

「3月11日の夜から3日間は、子どもたちと先生方が学校と一緒に寝泊まりしました。大人たちは別に学校は学校でまとまることにして、1年生から3年生までは音楽室、4年生から6年生は図書室でした。実際、帰りたくても帰れない。学校は高台にありましたが、道はがれきなどに埋もれてしまっていた。道ができたのが4日後。でも、先生が夜も一緒に寄り添ってくれたということは、子どもたちの精神的な支えになったと思います」

避難所は8月7日まで開設されていた。そうした中、大久保校長が掲げたテーマは「学校生活の充実」だった。

「家屋の6〜7割が全半壊するという地区でした。お父さんや祖母を亡くした児童もいました。教材や食事もままならない状況下で、それでもせめて学校では友だちや先生方と一緒に過ごす。学べる日常を整えていく。学校の時間と空間を平常時に戻すための環境づくりを目指しました」

▼「生かされて明日へ」

津波襲来から1カ月が過ぎた4月11日、当時、山田町教育長だった岩船敏行いわふねとしゆきさんは、発災時のこと、避難所でのことなど、当時の心境を「生かされて明日へ」という詩文にまとめた。



宮古地区小学校陸上記録会では本町の児童が大活躍

避難所には、不自由な暮らしを知恵と工夫と組織の力で乗り越えようとしている人たちがいた。津波跡地から流木を集めてたき木とし、壊れかけの雨どいをつないで集めた沢水で洗濯場を作り、ドラム缶で風呂を沸かしていた。協働のたくましさや誰かを思うやさしさに「生きる力を見た」という。

「今は辛くとも、前を向いて進もう。それが生かされているものの務めかな／まもなく新学

の立て直しに向けて」という提言を作成。これは県独自の運動だったが、各地域の特性や特徴により課題やテーマは少しずつ違った。

「私が山田町について感じるのは、子どもたちも保護者の皆さんも、学校行事や地域活動にとっても積極的・協力的だということです。山田はお祭りや伝承されてきた芸能も多い。中学生にも高校生にも、それぞれの年代にしっかり受け継がれています」

地域の大人が指導者となり、子どもたちは地域みんなが育てようという意識の強さが山田町のよいところだという。

山田町教育振興運動では「仮設住宅入居者との交流活動としての花壇整備(大浦小・山田北小)」「地域住民との共同作業によるプール清掃、盆踊り大会の実施(山田北小)」「サケの稚魚放流(織笠小)」「学校新聞『海よ光れ』の発行と避難所などへの配布(大沢小)」といった活動実績が報告された。山田つ子はたくましい、と岩船元教育長は語る。

「例えば宮古市内の高校で運動部を引っ張るのは山田の子が多いんです。元気だし、みんなやろう、というチーム作りが上手。避難所でも山田高校の生徒たちは掃除やお年寄りのお世話などを積極的に行っていました。誰かの役に立てたなら、という気持ちで自然でやさしい。このよさをずっと守り、延ばしていけたらと思います」

▼経年で変わりゆく対応

「発災の直後から大事にしてきたのは心の

期。子どもの元気な声が後押ししてくれるはずだ／子どもたちに明るい笑顔を届けよう。がんばろう先生方。がんばりましょうみんな／生かされて明日へ」

6月、町教育委員会が復興に向けての全体図をまとめた際も、この「生かされて明日へ」に込められた思いは、その未来地図の柱の一つとなった。

翌年9月、町教育委員会では『教育振興運動

サポート・ケアです」

学校教育課教育次長の箱山智美はこやまともみさんも心のサポート・ケアの大切さを話す。

「心のサポート・ケアでは、県から山田町に1名カウンセラーを派遣していただき、各学校を巡回し、指導主事を中心に子どもたちの様子をとりまとめ、対応に当たってきました。これが核になる部分で、現在も続いています」

発災直後は子どもたちへの関わりを主に、やがて10年の中では保護者への関わり、取り組みも増えて行く。家庭環境をも含みながらの対応である。

「仮設住宅に住む子どもたちが相当数いました。令和2年度で仮設住宅はゼロになります。中には生まれたときから仮設住宅で、そこから学校へ通う子もいました。そして仮設住宅からはどんどん人が減って行く……。生活環境がめまぐるしく変わってきたのが、山田の子どもたちです」

避難所や仮設住宅など慣れない環境下で発生するストレスへの対応、本設住宅へ移った際の環境変化への対応、それに合わせた保護者への対応。心のサポート・ケアの方法もまた、時間の経過と機に応じて短いスパンで変化してきた。

「もうひとつ、発災直後から言われていたことは『生活環境の変化に起因するであろう不登校や、問題行動による学校の荒れなどは5年後にピークを迎える』ということでした。これは阪神淡路大震災の経験からそう語られていたことです」

実際、山田町でも5年後には不登校の出現



地元漁業への理解を深める「定置網漁」見学 (山田小学校/令和2年10月)



自衛隊員と音楽で交流する子どもたち (旧山田南小学校 平成23年4月)



自然環境への理解や学習意欲を高める目的で行われる「海の生き物学習」



船越小学校の漁業体験。海の仕事の楽しさを学ぶ (令和2年6月)



農村地帯の豊間根小学校の児童は田植え体験で郷土の産業を学ぶ

状況はさまざまだ。一つひとつを検証しながら、類似ケースを解決する手がかりを探すこともあった。

この膨大なデータの集積もまた、復興の記録である。

心のサポート・ケアを継続しながら、一方で、山田町に起きたことも伝えて行かなければならない。

避けては通れないテーマが「津波伝承教育」だ。

震災直後には「海が怖い」「津波の夢を見る」と話す子どもたちも少なくなかった。大人たちもまた、子どもたちの心中を推し量り、海での体験学習を言い出せずにいた。

しかし、彼らのふるさと・山田町の目の前には、先人たちが生活の場としてきた海が変

わらず広がっている。これからもずっと。「海とともに生きていってほしい」。山田人なら誰もが子どもたちに伝えたい思いだ。

平成25年(2013)、船越小では、震災前から実施されていた「網おこし体験」という漁業体験学習を再開した。沖合に設置している磯立て網(小型の定置網)を「おこす(引き上げる)」漁法を学ぶ校外学習のひとつである。

その前年、体験学習の再開に際し、船越小では、保護者へのアンケートを実施。数名から心配との旨の回答があり、その年は見送られた。しかし翌年には反対する声はなく、再開されることとなった。

船に乗って沖合へ向かう子どもたちもまた喜んでいた。潮風に顔をほころばせながら、元気に網を引く子どもたちの様子に、同行した教職

▼心の復興にチームで対応

心のサポート・ケアが令和2年度まで続けられていることは前述した。佐賀敏子校長は、7年間の長期的な目標を設定し、そのた

「復興教育は、ずっと子どもたちの心に寄り添うこと。それはずっと、そして今も変わっていません」

「どの子どもががんばっていたのだと思います。保護者も、周りの大人たちも。ところが、だんだん力が抜けて行くなかで、そういう変化が現れてきた。科学的な分析はありませんが、示したデータは阪神淡路と同じような曲線でした」

震災から3年目ぐらいまでは震災という実体験と記憶へのケアだった。しかし5年目ごろからは生活環境の変化から生じるストレスへのケアが変わった。

「復興教育は、ずっと子どもたちの心に寄り添うこと。それはずっと、そして今も変わっていません」

▼「海とともに生きていってほしい」

心のサポート・ケアはまた、子どもたちの「心の記録」ともなった。はじまりは津波という出来事だったが、子どもたちを取り巻く

「子どもたちが元気を取り戻すことで教職員も元気になっていく。子どもたちの心のサポートは、教職員の心のサポートにもなっていました。学校の取り組みには多くのご協力があり、すべての力が掛け算されて面となり、元気を取り戻す素地ができたように思います」と佐賀さんは振り返る。

平成24年(2012)4月、2年ぶりの人事異動があった。内陸から転動してきた教職員の中には被災地の子どもへの気持ちや理解できていないのではと悩む先生もいた。また、被災体験がトラウマになっている先生もいた。そのため教職員の心のサポート・ケアが必要になった時期もあったという。

それでも全員の目標は「教育の復興」「子どもたちのケアのために」だった。明日へ向かう力をキーワードに据え、チームとして取り組むことで、やがて連携はひとつにまとまっていく。

率が5・8%になった。中学校でも落ち着きのない生徒が目立つようになった。阪神淡路大震災後に現れた状況が、山田町でもやはり起きた。

その理由については「データはあるが、詳細は分からない」と箱山次長。「考えられるのは、避難所から仮設住宅、そして本設の家へと幾度も変わってきた生活環境の中で自分の居場所が見つけられなかったからではないか、と思っています」

めの短期的な目標を立てながら日々の教育活動を創造し、工夫してきた。

長期的な目標とはもちろん「心の復興」。短期的な目標とは、その道程で現れるいくつもの課題に、ひとつずつ丁寧な手当てを行うこと。

員もまた、ほっとしながらも喜んだ。

▼「海よ光れ」

大沢小には、昭和63年（1988）以来、毎年秋の学習発表会で全校児童が演じる「海よ光れ」という伝統の表現劇があった。

漁師・辰治郎とその孫・正人の対話を展開の軸とし、明治時代から現代に至るまで、大沢の人たちが津波の惨禍（さんか）を乗り越えながら海と関わって生きてきた暮らしの風景を演じ上げるものだ。

児童たちは、背景に大漁旗が掲げられた舞台で、劇中歌や身体表現、方言を交えたセリフなどで大沢の漁労文化、海とともにある日常、津波の脅威などを描き出す。同時に、地域文化を自覚させ、伝承し、郷土愛を育む。

震災から2年後の平成25年（2013）には再び上演されたが、津波の記憶が生々しいとの理由から6年生だけで演じ、その後も津波の場面はソフトラ表現に抑えながら発表されてきた。

しかし、町内の小学校の統合を控え、最後の公演となる令和元年（2019）の発表会では、津波のシーンを従来のシナリオ通り演じるかの判断を児童たちに任せた。津波をどう捉えるのか。彼ら自身に考えさせたのである。

子どもたちの答えは「そのまま上演する」だった。最後の公演で、子どもたちは「津波だーっ！」「逃げるーっ！」というセリフをそのまま叫んだ。

・そなえる：東日本大震災について、地震や台風や大雨など自然災害が発生する仕組み、防災や避難の考え方。

佐々木茂人教育長は「自分の命は自分で守るということを、しっかりと理解してほしい」と話す。

「指示を待っているばかりではなく、自分で考え、行動するということ。地震は、ひとりで行うときにも起こるかもしれない。津波から命を守るのは『てんでんこ』です」

佐々木教育長は船越小の校長時代に「小学校卒業までに全員が25メートルを泳げるようになるう」という目標を掲げ、教育活動にあたってきた。

「山田は海のまち。海とともに生きていく技術や力も身に付けてほしい。心と身体全体で、山田というまちを好きになってほしいのです」

▼胸を張って次代へ伝えるために

「子どもたちに寄り添いながらも、時を経て『3・11』のことは意図的に仕掛けていくことも必要」と箱山次長。

震災のとき、現在の児童たちの「先輩」は何を思っ、どう行動したのか。避難所では、高校生たちが積極的に運営に関わっていた。子どもにできたこともたくさんあった。そんな当時のことも今はもう教材になる。



平成23年4月19日発行の大沢小学校学校新聞「海よ光れ」。第一面には「負けるなよみがえれ 大沢の海よ光れ！」と力強い大見出しが躍る



大沢小学校のオリジナル全校表現劇「海よ光れ」の一場面

津波の「伝承教育」は、ある年度の区切りから始められたものではない。子どもたちの心を測り、確かめ、ゆつくりと「津波」の脅威を学ばせるような指導が行われてきた。それは、海とともに生きてきた山田町の日常を、子どもたちの手に取り戻させることでもある。

「このまちに伝えられてきたことの美しさを理解できる子どもたちであってほしい。海は、怖いだけじゃない。立ち向かうこともできる。今、このまちで進む復興。現在の、それこそが立ち向かっている姿なのです」

学力や体力もだが、子どもたちの持つ可能性と力を上げていけるように努めている。それは、まさに「生きる力」を身に付けることだ。

今、あれほどの大規模災害でさえ風化という言葉がささやかれていく。津波の衝撃が、あの悲しみや苦しみが、たちまち忘れられてしまうことではないだろう。しかし、関心が薄れることで、いつかまた同じ悲しみを繰り返してしまうのではないか。

被災地が恐れていることは、自分たちへの関心が薄れることではない。被災地の人々が願うことは、もしもいつか、どこかのまちへ津波が襲いかかったとき、自分たちと同じ悲しみを味わっては欲しくない、あの辛さや苦しみに二度と遭ってほしくない、ということだ。

風化とは、再発防止の努力が薄れてしまうことだ。「忘れない」ではなく「忘れさせない」という文化」を創っていくこと。それが伝承である。子どもたちには、自分たちが津波の惨禍から

劇中、乱獲で魚影が減った海の再生を願って「オレたちの海！生き返れ！」と呼びかけ役が叫ぶと、全校児童が呼応して「海よ光れーっ！」と叫ぶシーンがある。

発表会には地域の大人たちも見に来ていた。子どもたちが海に叫ぶ場面に、山田人のたくましさを感じていた。

▼「いきる かわる そなえる」

現在、県内の小中学校では、県の復興教育プログラム「いきる かわる そなえる」に沿って震災・防災教育、復興教育が行われている。各市町村独自の取り組みもあるが、震災以降の基本的な教育復興計画は全県的にこのプログラムに従っている。

「津波てんでんこ」という言葉についても教え、他者や地域の人たちとの関わり方、関わることの大切さを指導しながら、復興教育の充実を図っている。小学校低学年、高学年、中学生に向けた同名の復興副読本もある。

例えば高学年向けのページでは、以下のような内容が64ページに渡って掲載されている。

・いきる：三陸鉄道の復活、もっこ（背負い籠）でお弁当配達した宮古市の姉妹、原発事故被災から救われ飼主と再会した猫の逸話など。
・かわる：山田北小学校を助けてくれたNPO法人「国境なき子どもたち」、釜石でコンサートを開いた不来方高校音楽部、地元水産品で加工品を開発する宮古水産高校。

立ち上がって生きてきたことを、胸を張って次代へ伝えてほしい。さらに次代へとつなぎ続けていくことで、同じ悲しみが繰り返されることのないように願うのである。



若船 敏行さん

元宮古市立山口小学校校長。退職後は山田町教育長に就任し、2012年に退任



佐賀 敏子さん

2010年～2014年、山田南小学校校長。盛岡市立社陵小学校校長を退職後、盛岡市教育委員会に社会教育指導員として勤務（～2020年3月）



大久保 裕明さん

発災時は大沢小学校校長。退職後は陸前高田市立博物館長を経て2019年同市教育長に就任



リアス線誕生記念に集まった町民の方々



子どもたちをはじめとした歓迎のイベント



2019年3月26日、織笠駅に到着した三陸鉄道

クローズアップ
山田人 ②
Close-up YAMADA-JIN

鉄路のチカラ

再びつながった三陸の鉄路 みんなのチカラで走る 情熱のマイレール

大津波で寸断されたJR山田線。廃線かとも噂されたが、復活を願う熱意は人びとをつなげ、その鉄路は三陸鉄道リアス線として復活した。路線名は変わろうとも、これからも旅人の、そしてみんなの思いを乗せて、列車は今日も三陸の海へ汽笛を響かせて走る。

▼ 8年ぶりの鉄路再開

平成31年（2019）3月23日、震災以降不通となっていた山田町の鉄道路線が、8年ぶりに運行を再開した。

鉄道事業者は「JR東日本」から「三陸鉄道」へ、そして路線名も「JR山田線」から「三陸鉄道リアス線」へと変わり、車両も、白色にライムグリーンのJR東日本カラーから、青・赤・白の三陸鉄道カラーの車両となった。

山田の海と山に警笛のこだまが戻ってきた。町民たちが待ちに待った運行再開の当日、午後は雪が降る悪天候ではあったが、鉄道沿線の各駅では

開通記念イベントが開催された。陸中山田駅前の広場では、山田町の「ふるさと大使」であるSKE48（当時）の松村香織さんをはじめAKB48、HK T48のメンバーら7人による音楽ステージのほか、沿線では町民たちが大漁旗を振って開通を祝った。

かつてのオランダとの縁にちなんで風車をモチーフにした陸中山田駅に、釜石駅から発車した4両編成の記念列車が到着したとき、乗り込んでいた佐藤信逸町長は、多くの人たちが手を振って迎える姿を見て「見てください。こんなに多くの人：と、車内にいた関係者に胸を張った。町長自身も後日「鼻が高かった」と述懐している。

▼ 鉄道はまちを成り立たせる

山田町にもう一度列車を走らせようと、奔走した山田人がいる。

「記念列車が走ってきたとき『震災前の景色が帰ってきた』と思いました。歓迎のシーンの盛り上がりも、警笛の音も、踏み切りのカンカンという音も懐かしく…。うなりを上げるディーゼルエンジンの音に大きなチカラを感じました」

そう話すのは、陸中山田駅の近くで文房具店を営む松本龍児さんだ。

「大きな津波被害を受けたJR山田線は廃線の噂もありました。町の人たちの間からも『もう復活しないだろう』という声も。でも、鉄道がなくなることは、人の動きを大きく変えてしまう。鉄道は、山田町に必要なものなのです」

運休期間は代行バスもあった。しかし通学で宮古市や釜石市へ向かう高校生の中には積み残される子もいた。観光客からも不便がられた。

「列車なら車内で勉強もしやすい。旅行者なら車窓から海を眺めながら駅弁も広げられる。また、トイレがないバスはお年寄りには、実は不便なのです」

「鉄道好き」と言い切る松本さんは、鉄道のチカラと魅力は「人が集うところ」だと語る。「駅や駅前はどこも街の中心です。鉄道は、町を成り立たせるもののひとつ。旅人が来るのも、自分が旅立って、そして帰ってくるのも駅。80年代のはじめ、山田の街で商売を始めたとき、東京の見本市へ向かうときも列車しかなかった。住んでいる町に鉄道があるって、すごく幸せだなあと感じていました」



横断幕を持って待ち構えている町民



松本 龍児さん

陸中山田駅前で文房具店経営。「地方ローカル線を守る市町民の会」の事務局長を務め鉄道の利用促進策を推進する



青・赤・白の三色のラインが映えるリアス線三陸鉄道



山田湾をバックに走る JR 山田線時代の車両

「でも、同時に、住民たちが利用しなければ何のための復旧だったのかと言われる。鉄道を残そうと言いつづけてきたからこそ、これからの利用促進についても考えていかなければ……。そう思いはじめていました」

「鉄道はつながった。正直ほっとしました」と松本さん。

これを受けて、12月24日、達増拓也岩手県知事、沿岸12市町村長、望月正彦三陸鉄道社長（当時）らは盛岡市で会議を行い、移管の受け入れについて合意（移管協力金30億円の使途については継続協議）。12月26日、達増知事と山本正徳宮古市長は、都内で富田哲郎JR東日本社長（当時）と会談し、上記案を受け入れる方針を伝えた。

「鉄道はつながった。正直ほっとしました」と松本さん。

「でも、同時に、住民たちが利用しなければ何のための復旧だったのかと言われる。鉄道を残そうと言いつづけてきたからこそ、これからの利用促進についても考えていかなければ……。そう思いはじめていました」

「鉄道はつながった。正直ほっとしました」と松本さん。

これを受けて、12月24日、達増拓也岩手県知事、沿岸12市町村長、望月正彦三陸鉄道社長（当時）らは盛岡市で会議を行い、移管の受け入れについて合意（移管協力金30億円の使途については継続協議）。12月26日、達増知事と山本正徳宮古市長は、都内で富田哲郎JR東日本社長（当時）と会談し、上記案を受け入れる方針を伝えた。

田線復興調整会議」の席上、JR側は、210億円と試算された復旧費用のうち、線路や設備などの原状回復に伴う140億円を自社で負担するとし（残り70億円は公的資金を活用して自治体などが負担）、当区間の運行事業を三陸鉄道に、線路などの鉄道施設を三陸鉄道と沿線4市町にそれぞれ無償で譲渡、経営移管する案を示した。

JR側は、三鉄への移譲について「山田線は昭和62年（1987）のJR東日本発足後から震災前までに輸送人員が6割減っている。三陸



2014年4月19日 「三陸沿岸を鉄道でつなぐ市民の集い」で発表する松本さん



2013年11月9日 宮古市で開かれたシンポジウム「みんなで考えるJR山田線の復旧」

バスではない 鉄道での復旧を熱望

旧国鉄山田線は、大正年間、盛岡から山田町を目指して建設が始められた。

大正12年（1923）、まず盛岡・上米内間が開業。順次延伸開業し、昭和9年（1934）には宮古まで、そして翌年・昭和10年（1935）には山田まで開通した。

釜石までの延伸は、昭和14年（1939）。昭和25年（1950）の釜石線（花巻・釜石間）全通よりも15年も早い。

しかし、山田町に鉄道の響きが伝わって76年目の平成23年（2011）、東日本大震災による大津波は、山田線の宮古・釜石間のレールを数カ所にわたって寸断した。

同区間55・4キロメートルのうち21・7キロメートルが浸水。線路の10%、13駅中、陸中山田、織笠など4駅のほか、第1・第2織笠川橋梁など橋梁7カ所、盛り土10カ所が破壊されたり流失するという大規模被害だった。

おりしも平成22年（2010）、岩泉線の土砂崩れ脱線事故が発生。赤字路線でもあった岩泉線は「復旧断念か」と、しきりに噂されていた（平成26年＝2014年廃止）。

山田線もまたJR東日本管内では屈指の赤字路線だった。復旧しても利用者増は見込めない。JR側には、鉄道での復旧に対してためらいがあった。

当初、JR側は「バス高速輸送システム（BRT

T）での仮復旧」を繰り返し提案した。BRTは、バス専用道路の整備により鉄道並みの定時制確保や、鉄道より低コストであることが強みで、停車駅や運行本数を増やすことも容易だ。

しかし、宮古・釜石間は、路線バスがすでに1日1往復走っていた。沿線の宮古、釜石、山田、大槌の4市町は「あくまで鉄道による復旧」を要望した。

「BRTになったら鉄道はそのまま廃止される」――。危機感を抱いた松本さんは、山田線沿線の4市町の有志で「地方ローカル線を守る会」を立ち上げ「あくまでもJRの鉄道での復旧を」と訴えた。熱意は行政にも伝わり、平成24年（2012）10月には、釜石市が主催者となって「JR山田線の早期復旧を求める会」というフォーラムも開催された。

「山田線が消えることは、南北の三陸鉄道沿線の人にも申し訳ないな、と。やはり三陸は一本のレールで結ばれているべきと思いました」

「地方ローカル線を守る会」は、2カ月に一度、情報交換を行い、その間、行政との連絡、現状の把握、また住民の声を集めたり、4市町ごとの会で住民アンケートを行うなどの活動を続けた。

「三陸地方の鉄道を守りたい」――その思いがつながれていった。

三陸鉄道への移管決定

平成26年（2014）1月31日、「第7回山

鉄道の一連運用により利用促進につながる」と説明した。

しかし「赤字路線の山田線を引き継ぐことは、新たな財政負担を抱えることになる」と慎重な態度をとった。

そして同年11月25日、盛岡市で開いた首長会議において、県は沿岸12市町村長らに対して

「①一時金を上積みして30億円を負担 ②車両の無償譲渡 ③軌道強化（被災を免れた約46kmの区間についてもコンクリート製枕木や三鉄同様の太い高規格レールへの交換、橋の塗装、トンネル修繕など） ④検修庫・施設管理拠点の整備 ⑤人的支援 ⑥観光客誘致などでの協力」などの提案がJR側からあったことを報告した。

これを受けて、12月24日、達増拓也岩手県知事、沿岸12市町村長、望月正彦三陸鉄道社長（当時）らは盛岡市で会議を行い、移管の受け入れについて合意（移管協力金30億円の使途については継続協議）。12月26日、達増知事と山本正徳宮古市長は、都内で富田哲郎JR東日本社長（当時）と会談し、上記案を受け入れる方針を伝えた。

「鉄道はつながった。正直ほっとしました」と松本さん。

「でも、同時に、住民たちが利用しなければ何のための復旧だったのかと言われる。鉄道を残そうと言いつづけてきたからこそ、これからの利用促進についても考えていかなければ……。そう思いはじめていました」



令和元年(2019)10月に襲来した「台風19号」は、その半年前に全線開通したばかりのリアス線に再び大きな傷を残し、路線は約半年間の運休を強いられた。しかし令和2年(2020)3月、リアス線は復旧工事を完了。鉄道の響きがもう一度、三陸に戻ってきた



たくさんの大漁旗に迎え入れられる三陸鉄道(2019年3月23日/織笠駅)

笑顔が物語を創り出していく。そこそが「鉄路のチカラ」だ。
三鉄の車両を彩る「青・赤・白」の三色は、それぞれ「三陸の海」「鉄道に対する情熱」「誠実」を表す。
復興のシンボルであるとともに、これからの海の魅力や地域の情熱をも伝えていく力強い鉄路なのだ。



なかむら いちろう
中村 一郎さん

三陸鉄道株式会社代表取締役社長。沿岸広域振興局長、復興局長などを歴任し2016年より現職



こたつ列車などさまざまな企画列車も走る



観光客や学生へ向けた震災学習列車

▼ 三陸を貫く「マイレール意識」

「山田線がリアス線として復活できたのは、住民の皆さんの熱意があったからこそです」と語るのは、三陸鉄道の中村一郎社長。

「三鉄は昭和59年(1984)の開業以来、地域の皆さんの『マイレール意識』に支えられてきました。今では三陸沿岸道路も伸び、家用車で移動される方も多い。でも『三鉄に乗りたい』という方も多いです。三鉄が走る風景が三陸という地域の魅力だと言ってくくださる方もいらっしやいます」

今回の経営移管に伴い、山田線の宮古・釜石間は、それまでの三陸鉄道「南リアス線」「北リアス線」と統合。「三陸鉄道リアス線」として、163キロメートルを一貫運行する日本最長の第三セクター鉄道となった。

「車両基地も宮古に集約できて一元的な管理が可能になるなどのメリットもあります。一方でコストが増えた、というのも正直なところではありますが」

東日本大震災では、三鉄も甚大な被害を受けた。駅舎やレール、路盤などが各所で流失し、車両も3両が使用不能となった。しかし、地震発生からわずか5日後の3月16日には、久慈・陸中野田間で運行を再開し、また、被害が少なかった他区間でも3月末までには運転を再開。鉄道の響きは被災地を大きく勇気づけた。平成

26年(2014)4月6日には全線が復旧。三陸地方は沸いた。

三鉄では「震災学習列車」という企画列車も運行している。車内には被災した地域を紹介するパネルが掲示され、そして車窓からは復興が続く「今の三陸」が見られる。

「三陸地方を貫く鉄道は、多くの方の思いや応援があって残された鉄道なのです。そのことを知っていただけたらと思います。鉄道のこと、津波への教訓も、命を守るためにはどう行動すればいいのかも伝えていく。それが私たちの恩返しです」と中村社長。

そして、これからの三鉄をもっと盛り上げた——という思いは松本さんも同じだ。

「三鉄は、企画の持ち込みにも柔軟に対応してくれるし、フットワークも軽い(笑)。「一緒に走って、一緒に走る」仲間でもありません」(松本さん)

▼ 情熱と笑顔を乗せて走る

山田町をはじめ、沿線12市町村では今、多くの名物や観光プラン、アクティビティなどが創造されている。自治体もこれをバックアップし、住民たちも駅舎内外の清掃や花の植栽といった周辺の美化活動を行っている。

「乗って残そう」「私たちの三鉄」「地域の足」「より便利に楽しく」「山田へ、三陸へおでんせ」——住民たちと行政と鉄道会社の、地域を盛り上げていこうとするたくさんの情熱と



斉藤さんが役場屋上から撮影した写真(2012年4月15日撮影)

定点観測写真

「まちはこれからどう変わる?」
「淡々と、しかし熱く見つめ続けた
若き山田人のふるさとへの視線」

山田の街に復興の槌音が響き始めたころ、役場の屋上から、ふるさとの姿を見つめる高校生の視線があった。仕事でも義務でもなく淡々と捉え続けた画像。そしてそこには誰もがもう一度立ち上がるうとしていた、あの日々からの記憶が焼き付けられている。

▼「撮っておこうかな」という 軽い気持ちで

「明治三陸地震津波(明治29年6月15日)」「昭和三陸地震津波(昭和8年3月3日)」。
さらにさかのほれば、三陸地方は数百年から数十年ごとに大津波に襲われてきた。
その惨禍は古くは絵にも残され、明治以降は写真にも撮影された。しかし、現代ほど写真が身近なメディアでなかった時代のこと。多くは新聞記者やプロカメラマンが撮影したものだ。
平成23年(2011)3月11日。またしても大津波が三陸地方を襲った。昔と違い、デジタルカ

メラやカメラ付きの携帯電話が普及していた。多くの人が、たくさん写真を撮り、津波が押し寄せる瞬間だけでも膨大なデータが残された。
「見るのは辛い」という声もあった。しかし「ふるさとが、これからどう変わって行くのか。その様子を残したい」という人も多かった。

発災当時、高校2年生だった斉藤潤さんその一人だ。翌年、大学進学のため山田町を離れるまでの1年間で、父親に買ってもらったカメラで、復旧から復興へと歩み出した街の姿を撮影し続けた。
「なにか切実な思いがあったわけではありませ

ん。山田の街がこれからどう変わって行くのか。

撮っておこうかな、という軽い気持ちでした」
自宅は大沢地区の、海から100mほどの場所にあった。津波が押し寄せる瞬間は避難した大沢小学校から見えていた。自宅が流されるころも見た。

▼撮り続けたから 気付いたこともある

「その時、特別な感情はなく……。ただ、これからどうなるんだろうという気持ちでした」
避難生活は豊間根中学校で過ごした。眠れない日が続いた。そして4月初め、友人と山田の街まで「自転車で見に来た」。

「街にはごみの臭いや火事のあとの焦げ臭さが立ち込めていました。なんてひどいことになったんだらうと。でも、こんなに変わってしまった街が、このあとどんなふうに復旧して行くのかなと思ったとき、その様子を残しておきたいと思ったのです」

斉藤さんの写真には、例えばメディアの関係者が「何かへの掲載」を目的として撮影した写真とは違う、住民が撮影した淡々とした視線がある。気負いなくふるさとの様子を冷静に捉えながら変化を見逃したくないという愛情が浮かんでくる。

5月の連休を過ぎたころから、大沢の自宅跡地などいろいろな場所から撮影を開始し、やがて「見晴らしがいい」ということで山田町役場の屋上からの定点観測が恒例となった。「家族と一緒に役場近くの被災しなかった家を

▼これからも三陸の海辺で 暮らしたい

翌春、大学進学のために山田を離れるとき、入れ替わるように帰郷してきた姉に続きを依頼した。
「軽い気持ちで続けてねと。でも、姉は早々に止めちゃったみたいですよ」

大学を卒業後は普代村役場の職員となった。「山田町役場も考えたのですが、姉が先に勤めていたので何となく避けました。でも、沿岸のまちで仕事がしたいと思っていました」

10年が過ぎて思うことは「駅の周辺に建物も家も増え、にぎわいが戻ってきた。震災前の街も好きでしたが、今の街も好きです。10年前の写真と

見比べると、やっぱりすごく変わっていて、撮っていてよかったって思えます。自分は、これからもずっと三陸で生きていく。海のそばにいたいと思う。やっぱり海が大好きなんです」
人が生まれて初めて吸いこんだ空気は、そのまま吐き出されずに胸の奥底にとどまり、その人の生き方にずっと影響を与え続けるという。
山田湾の潮の香を吸い、波音を聞いて育った山田人・斉藤さん。海の風は、ずっと斉藤さんのそばにある。変わるものと変わらないものを知る視線が捉えた画像は、未来への語り部として残されていくだろう。



見晴らしがいい役場屋上から撮影



さいとう じゅん さん

山田町生まれ。高校生のとき大沢地区の自宅で震災に遭遇。大学卒業後、普代村役場に勤務



クローズアップ
山田人④
Close-up YAMADA-JIN

宮古消防署に勤務する山崎さん

消防士を志して

強くやさしい勇敢な心が
誰かの命を守り、支える

大きな使命と責任を担う消防士

「危険でも誰かがやらなければいけない」——それが消防士の仕事だ。東日本大震災では助けられた側から、今度は誰かを助ける側へ。危険な現場へ真っ先に駆けつける、強くやさしく、たくましい心で、消防士・山崎竜輔さんは今日も訓練を続けている。

▼ 志望のきっかけは担任の先生

平成30年（2018）4月1日時点では、全国に16万4973人の消防職員がいる。

「消防士」は、火災はもちろん、台風や洪水の危機が迫ったとき、あるいは津波警報が発令され、誰もが海に背を向けて逃げようとしているときでも、人々の動きとは逆に危機が迫る方向へ真っ先に飛び出して行き、避難を助け、避難行動のしんがりを務める。

消防士の業務は消防士にしかできない。任務は特殊であり、危険だ。担っている責任も重く、使命も大きい。しかし、大規模な自然災害

が頻発する昨今、消防士の活躍がクローズアップされる機会も増え、消防士を目指そうという若者も多いという。

宮古地区広域行政組合宮古消防署に勤務する山崎竜輔さんは、大浦小学校6年生のとき、東日本大震災に遭遇した。小谷鳥地区にあった自宅は全壊したという。

避難所生活を経て大浦地区の仮設住宅に入居。そして山田中学校から宮古商業高校へ進学。高2の途中からは長崎地区の新しい家から通った。

「高校は会計科で、部活はバスケット部でした。部活を引退した高3の夏、進路を決めなきゃと思っていったとき、先生から勧められたのが消防

士でした。理由ですか？ たぶん体力がある、とかじゃないかと」

▼ 支える側の人間になりたい と思った

それまでは学んだ勉強に関連する職業へ進もう、と漠然と考えていたが「先生の話を聞いてそれもいいなと思ったのです。体力にも自信もありました」

そのとき山崎さんの脳裏には、避難所生活をしてきた時期の映像がよみがえった。

「あるとき、避難所の裏山で火事があったとき、消防団の人が『よし、消してくっから』と出動する姿を見て単純にカッコいいと思いました」

また「避難所では、地区の皆さんにとってもよくしてもらい、多くの人に支えられていました。だから自分もそんなふうを支える側になれたらって思ってたんです」

部活引退後は毎日3時間、週末は6時間以上勉強し、40名ほど受験した中から2次試験も突破して7名の合格者に名を連ねた。

高校卒業後は、矢巾町の消防学校で半年間、50名の同期生とともに基礎を学び、筋トレなどもみっちり鍛えられた。

そして平成29年（2017）10月1日、山田消防署に配属となった。

1年目の思い出を訊ねると「あるとき、心肺停止状態の方に心臓マッサージをしたのですが、怖くて力を入れられませんでした。先輩が

代わってくれたのですが、自分の身体がこわばって動けなくなっことは、すごく悔しい記憶として残っています」

▼ 常に命を守る行動を それは消防士も同じ

令和元年（2019）には、台風19号の被害が発生し、署員は全員、田の浜地区で要救助者の救助に当たった。

「大雨の中での活動。がんばりどころだと思えました。『ありがとう』って言ってもらえた時は、自分がうれいというより、相手の方が、そういう言葉が言える気持ちになってもらえたことの方がうれしかったです」

消防士になったとき、両親も「よかったな」と喜んでくれた。妹と弟は消防士の絵を描いてくれたという。

誰かを守るとい立場になった山崎さん。その勇敢な心は、家族も頼もしく誇らしいと感じたはずだ。

消防士魂を、山崎さんはこう言う。

「辛くてもやらなければならぬ業務。チーム全体で解決し、全員が無事に帰ってくるのが何より大事です。また、ときには見たくないものも見えてしまいますし、訓練も楽ではありません。でも、誰かを助ける、支えるという立場になって初めて得る達成感もあります」

消防士は、事故や火災などの現場へ真っ先に駆けつけ、まさに今、苦しんでいる人、悲しん

でいる人たちと最初に出会わなければいけない仕事でもある。

「災害が発生したとき、誰かが亡くなってしまったようなことは絶対にあってはなりません。命を守る行動を常に考えておかなければ」と山崎さん。

消防士は、自らの命を懸けて誰かの命を救う。しかし、決してヒーローではない。消防士にも家族がいる。だから無事に帰らなければならぬ。

山崎さんたち消防士の出番がない、ということが、本当はいちばんなのだ。



卒業式に父親と



山崎 竜輔さん

宮古商業高校を卒業後、岩手県消防学校を経て2020年現在は宮古消防署に勤務



発災直後の「鯨と海の科学館」周辺。左手は山田湾と浦の浜

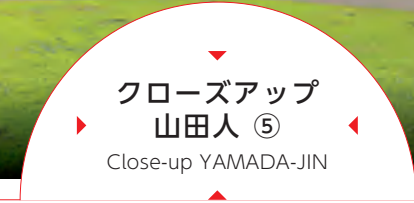


津波のあとゴミが付着したマッコウクジラの骨格標本。津波を泳ぎ切った雄々しい姿にスタッフや関係者は勇気づけられた

東日本大震災の大津波は、はじめ船越湾側から、次いで山田湾側から押し寄せて合流し、船越半島を孤立させる「水合（平野部が左右から

▼ 津波を泳いだマッコウクジラに励まされて

や大人たち約200人と一緒に行なった。「昔、山田町では捕鯨が行われていたんだよ、鯨を捕らえて海の恩恵を受けてきたんだよ、という町の歴史を子どもたちに伝えて行きたい。ここには町の歴史が詰まっています。海の素晴らしさや海との関わりを、鯨という生物を通じて知ってほしい。だから当館は『鯨』と『海』の科学館なのです」と、館長の湊敏さんは、天井からつり下げられた骨格標本を誇らしげに見上げる。



津波の傷痕も消え、公園も再整備された「鯨と海の科学館」(2020年9月)

鯨と海の科学館

災害の波を二度もくぐり抜けた山田の鯨 雄々しき「海の王者」とともに まちも人も海の未来を目指す

大津波に襲われ6年余の閉館。そして再開。さらに台風による2度目の被災からもよみがえった「町立鯨と海の科学館」は、山田町復興のシンボルのひとつだ。大津波そして台風をも泳ぎ切ったマッコウクジラの骨格標本が、負けない山田を見守り続けている。

▼ 「鯨」を通じて 「海」を学ぶ科学館

「山田町立鯨と海の科学館」（以下、鯨館）は、平成4年（1992）、釜石市を主会場として開催された「三陸海の博覧会」のパビリオンのひとつとしてオープンした。鯨館は、かつて大沢地区に捕鯨基地があり、山田町の沖合が捕鯨の好漁場であったことに由来する。

鯨をメインテーマとする科学館は全国的にも多くない。ここでは、鯨の生態や種類についての詳しい紹介のほか、捕鯨をはじめ町の漁業の歴史と技術、海の不思議や海と人との関わりについて学ぶことができる。

ついて学ぶことができる。全国的にも注目度は高い。

山田町で捕鯨の対象となっていたのは、イワシクジラ、ナガスクジラ、そしてマッコウクジラなどだ。現在、館内には鯨館のシンボルとしてマッコウクジラの骨格標本が展示されているが、これは昭和62年（1987）、商業捕鯨が世界的に禁止となる前年、山田船籍の捕鯨船が釜石沖で捕らえたものだ。

全長は17・6メートル。マッコウクジラの骨格標本としては世界最大級とも言われている。展示に際しては前須賀海岸の砂浜に約3年間埋めて脂分を取り除き、掘り起こしは町の子どもの手で

津波で挟撃をうけて水中に没すること」と呼ばれる現象が起きた。船越半島の付け根に建つ鯨館は、両側から襲ってきた津波に飲み込まれた。

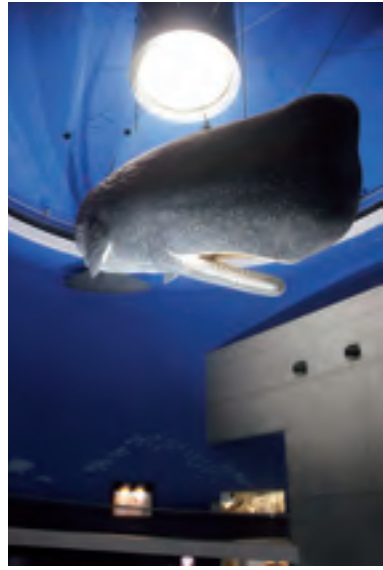
「流されてきた船や家屋などもぶつかり、一階の入り口は破壊され、津波は館内を通り抜けていきました。建物自体は円筒形だったので幸いしたのか構造的なダメージはほとんどなく、スタッフも全員無事でした。ただ、館内には泥がうずたかくなまり、散乱した展示物が泥の下に埋まってしまいました」

湊館長は「地獄絵図のようだった。これで終わったと思った」と述懐する。それでも、館内に立ち入った湊館長の目に飛び込んできたのは、泥や海藻などをかぶりながらも、ワイヤーにつるされたまま宙を泳ぐマッコウクジラの骨格標本だった。

「隣にあったミンククジラの標本も無事でした。あの津波を泳ぎ切ったんだなって思うと胸がいっぱいになりました」

建物と鯨は残った。特に骨格標本は学術的に貴重な資料でもある。「復旧は無理だろう」と考えていた町の関係者たちも骨格標本を見て励まされた。

「これは大切な町の財産だ」「山田の歴史を残さなければ」――。町は施設の復旧を決断する。



館内でひととき目を引くマッコウクジラの模型



平成 29 年（2017）7 月 15 日、津波襲来の日から 2318 日ぶりに再開した日の再開記念式典



鯨館スタッフとボランティア学生の協働で作業が進められた



泥土が残る館内に散らばった資料を回収



救出された資料の安定化処理作業



資料は仮設収蔵庫でひとつずつ水洗いし、脱塩する

▼ たくさんの方が支えられて再開

再開を目指してスタッフたちの復旧作業が始まった。それは、まさに闘いだ。館内に流入した泥はひざ丈ほどあり、さまざまな破片やごみも大小問わず混ざっていた。それらを全て片付けながら、展示物を探し出し、救い出していた。

「入り口から少しずつ片付けていきましたが、もう、気が遠くなるような作業でした。資料らしいものは片寄せ、泥を洗い、資料台帳と突き合えます。単に撤去だけだったら、こんな苦労はなかったはず」

支援や応援も全国から寄せられた。回収された資料の保存や洗浄、整理といった修復を支援してくれた機関や団体は、国立科学博物館、岩手県立博物館、文化財レスキュー、東京海洋大学、筑波大学、弘前大学、神奈川大学などで、館内で救援作業に当たったボランティアは延べ 800 余名を数えた。

「多い日には 50 人以上のボランティアが黙々と作業してくださいました。そして 5 カ月ほどすると、目に見えるがれきはほぼ片付けられました」

東京海洋大学は、鯨館の再開に向けた資料の再展示の監修も引き受けてくれた。

「学生さんたちが『勉強になりました』と言ってくれたのがうれしかったです。再開するまで 6 年 4 カ月かかりましたが、でもこれは私

流入し、一階部分を再び泥土で埋めてしまった。そこは深海の砂地をイメージしたフロアでした。掃除では追い付かず、結局、床のカーペットは交換しました。当初は令和 2 年（2020）3 月 1 日に一部開館する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり延期といたしました。一部ですが再々オープンしたのは、台風から 9 カ月後の 7 月 15 日でした」

▼ 「王者」が棲む山田の海を知ってほしい

マッコウクジラは海洋系生物の頂点に君臨するとも言われるほど強く大きな生き物だ。サメやトドやシロクマなども襲う。海のギャング・シャチ。さえ寄せ付けない。

津波に襲われても、台風に見舞われても立ち上がった「鯨と海の科学館」。スタッフたちの「負けない気持ち」の真ん中には、いつもマッコウクジラの骨格標本があった。

「約 8メートルの津波に襲われても、マッコウクジラの骨格標本は残りました。山田町の復興のシンボルのひとつです。負けない。諦めない。そんな思いと姿を皆さんに伝えていくのも恩返しです」と湊館長。

今、鯨館では、子どもたち向けに、海や磯を体験してもらう学習プログラムも企画中だ。「防潮堤の工事が進み、海が見える場所も減り

たちにとっても勉強の時間でした。この作業があつて資料の一つひとつがとても大切なものになり、解説の仕方も上達したかもしれません。人と人とのつながりもうれしく温かかった。震災なんて、もちろんなければよかった出来事でしたが、でも、震災がなければできなかった体験もたくさんあります」

▼ 台風襲われて二度目の休館

平成 29 年（2017）7 月 15 日、鯨館は 2318 日ぶりに再開した。湊館長は「10 年かかる」と予想していたという。

「いろんな人たちの思いが重なった再開であり再会。でも肩の力を抜いて、町の人たちみんなと一緒に楽しみたい、みんな喜びたいと思いました」

開館を待ちわびた子どもたちや、前須賀海岸で鯨の骨の掘り起こしを手伝った、かつて子どもだった 40 代の方々も大勢来館した。

そして、掘り起こしの様子を写した写真やビデオを見ながら「これがパパだよ。みんな掘ったんだ」と子どもたちに誇らしげに教えたりする姿もあった。

ところが、令和元年（2019）10 月 13 日、またしても自然災害が鯨館を襲った。

前日深夜、三陸沿岸に接近した台風 19 号は町内に大雨を降らせ、鯨館裏手の森から流れ来る沢水を氾濫させた。裏の三陸鉄道の路盤は崩落。あふれた泥水が鯨館の扉の隙間から館内に

ました。でも、山田はやっぱり海の町。海での生き方、海辺での暮らし方、海との関わりを、いろんな体験を通じて伝えたい。

磯には小さな生き物たちもたくさんいる。見て、触れて、観察力と考える力も身につけてほしいという。

「私たちは、次の世代へ渡していく海を守らなければいけません。なぜ守らなければいけないのか？ そういったことも一緒に考えて行きたいと思っています」

鯨を捕まえることはもうなくなったけれど、船越半島の沖合には、今も「海の王者」が棲んでいる。「鯨と海の科学館」は、そんな雄大な海のそばに、これからも暮らしていく「山田らしさ」を教え育てられる施設でもある。



湊 敏さん

山田町立鯨と海の科学館長。織笠漁協協同組合参事、山田町観光協会事務局長などを経て、2011 年より現職

座談会

《復興とともに歩んできた”新人職員”の十年》



菅野 遼さん

志望の動機
山田町は母のふるさと。幼いころから親しみがあつたし、山田町に関わる仕事がしたいと思った

菅野 自分は釜石の自宅にいました。釜石も津波被害はひどく、国道は、道は寸断され、どこにも行けない、動けない状態でした。一週間ぐらいして、知人に「道が通じたぞ」と言われ、その人の車で山田へ連れてきてもらいました。



震災2週間後の町役場周辺

方々に交じって5月中旬ごろまでは支援物資の仕分けや運搬をしていました。先輩の職員の方々がひどく疲れている様子が見えて、自分も早く戦力になりたい、そう思っていました。



町中央公民館に運び込まれる支援物資



尾形 晶子さん

志望の動機
臨時職員として勤務し、町の仕事に興味を持った。正職員として町政に深く関わっていききたい

た。当時はまだ電気もきいていなくて、避難所から提出された名簿も手書きで未整理。お名前を探すのはたいへんでした。亡くなられた方のことをお伝えすることはつらかったです。でも、一方では再会にうれし泣きをされる方もいて、そういう時はこちらもうれしかったですね。



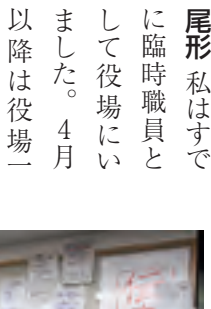
役場のロビーに張り出された親しい人の安否を尋ねる掲示板



芳賀 裕将さん

志望の動機
地域の皆さんの役に立てる仕事に就きたいと思った

芳賀 大槌町の臨時職員でした。震災直後、吉里中学校には、山火事のためにへりで移動した田の浜地区の方々が避難されていて、数日後、山田町の沼崎町長(当時)がその方々を迎えに来られたとき「4月から入庁予定の芳賀です」とあいさつをしたら「じゃあ、明日から山田の役場に来てくれ」と。



佐藤 俊輔さん

志望の動機
平成の大合併で再編されていく地方のまちを見て、ふるさとである「山田」を残し、活気ある町にしたい

尾形 私はすでに臨時職員として役場にいました。4月以降は役場一階ロビーで「誰々さんはどこにいますか？」と安否確認を求めて来られる町民の方々の対応をしていました。当時はまだ電気もきいていなくて、避難所から提出された名簿も手書きで未整理。お名前を探すのはたいへんでした。亡くなられた方のことをお伝えすることはつらかったです。でも、一方では再会にうれし泣きをされる方もいて、そういう時はこちらもうれしかったですね。



クローズアップ
山田人 ⑥
Close-up YAMADA-JIN

開催日 令和2年6月29日

- 出席者
- 阿部 栄美 (健康福祉課)
 - 尾形 晶子 (税務課)
 - 甲斐谷 和樹 (企画財政課)
 - 菅野 遼 (国保介護課)
 - 佐藤 俊輔 (生涯学習課)
 - 齋藤 絢介 (建設課)
 - 鈴木 卓郎 (水産商工課)
 - 芳賀 裕将 (上下水道課)
 - 菅野 麗奈 (町民課 ※後日取材)
- ※()内は辞令交付後の最初の配属先
- 聞き手: 石田 治 (フリーライター)

東日本大震災が発生した平成23年(2011)春、山田町役場には9人の新人職員が入庁しました。大津波の直後のこと。町民たちは悲嘆と混乱の中にあり、先輩職員たちは震災対応に追われていました。そうした中で行政職員となった新人たちは、何を思い、どう行動してきただけでしょうか。復旧から再生へ。町の復興とともに歩んできた若手職員に、山田町の十年と、そして願う山田町のこれからについて語ってもらいました。

役場職員の十年

座談会

《復興とともに歩んできた”新人職員”の十年》

——皆さんは、東日本大震災が発生した年の春、町の震災対応が続く真最中に役場職員として入庁されました。4月からの新しい職場での活動や活躍を期しておられたはず。しかし、今日明日のことを思うだけで精いっぱいという方が町にはたくさんいらっしゃいました。4月1日より前に役場へ集合し、支援物資の仕分けなどを行われたことが役場職員としての最初の仕事と伺っています。そこで感じられたことなどをお聞かせください。

——仕分け作業の際は、何をしましたか？

鈴木 物資はトラックで運ばれてきました。箱の書きを頼りに、それらを担ぎ下ろしてました。

菅野 それを大まかに仕分けして、そのあと自衛隊の方が各避難所へ運んでいましたね。避難所からも必要なものについてリクエストが来ます。企画財政課が、その数を把握して仕分けしたり、また、食事などについては栄養士の方が避難所ごとに栄養計算をしていたようでした。

——先輩職員の懸命な様子を見て、感じられたことなどありますか？

鈴木 寝袋を持ち込んで庁舎内で寝泊まりされている先輩職員もたくさんいました。自分は自宅へ帰ることができたので、なんだか申し訳ないな、という気持ちもありました。



鈴木 卓郎さん

志望の動機
人のためになる仕事に就きたいと考えたため

——通常であれば4月1日に辞令交付式があったはずですが、この年はバラバラだったとうかがっています。

齋藤 交付式というか辞令書は、4月に町長室で

ころもありましたが、あのころはまったく思いもしませんでした。



阿部 栄美さん

志望の動機
山田町の人や豊かな環境に育てられてきた感謝がある。同じ気持ちを今度は与える側の人間になりたい

——復旧が始まった、進んだかなと実感した瞬間ってありましたか？

菅野 仮設住宅ができて、避難所がだんだん解消されていったのが夏ごろでした。復旧が進んだというか、スタートラインに立てたかなという気持ちですね。少しずつ進んでいるのかなと。

——新人研修も、通常の年とは違っていたかと思えますが？

齋藤 通常であれば、庁舎内で半日ぐらいかけて、総務課長などが行政の仕事について話すのですが、当時はなかった。というよりも、できなかったというのが現状だったと思います。会議室なども災害対応のミーティングに使われていたり、物資もあちらこちらに積まれていましたし。

——研修の一環として自衛隊のヘリで上空から町の様子を視察したと伺っています。その時の感想をお聞かせください。



上空から見た山田湾(震災から17日後の3月28日のもの)

受け取りました。全員だったかどうかは覚えていませんが、出席者は作業服姿でした。それぞれの配属が決まったのはゴールデンウィーク明けだったと思います。それまでは災害対策本部付けの新人職員ということで、物資の仕分けなどを行なっていたので配属先の業務内容などはまったく分からなかったです。そして町もたいへんな状況にある。しかも平時の業務じゃない。何をすればいいのか分からずに不安でした。ちなみに最初の仕事は建設課での仮設住宅申し込みの受付でした。



発災からの出来事が時系列で書き記された町災害対策本部のホワイトボード



齋藤 純介さん

志望の動機
生まれ育った地域の役に立つ仕事がしたい

菅野 私の配属先の国保介護課では、被災した方が福祉サービスを受ける際の利用料を免除するかという業務でした。施設の復旧などは、まだまだという段階でした。

甲斐谷 生まれた町のために働きたいという思いで入庁しましたが、震災からの復旧の中では、そういう気持ちを持つ余裕がなかったというか……。企画財政課で職員が使うパソコン管理が最初の仕事でした。町の人たちのためというか、庁内を向いた仕事でもありませんでした。



甲斐谷 和樹さん

志望の動機
地元のために働きたいと思ったため

——この町は、これからどうなっていくのだろうか？ 復旧、復興の行く末、未来などはどう思われていましたか？

阿部 未来のことなどは想像しづらい状況でした。現状を見て気持ちがいっぱいになって考える余裕なんてなかったです。今日、復興が進んだ様子を見て、こんな風に変ったんだなどとは感じると

齋藤 町の上空を飛ぶこと自体、思ってもいなかったことですが、改めて見渡すと本当にひどいことが起きたんだなど。あるべき場所にあるべきものがない。言葉にならないというのはこういうことなんだと思います。

甲斐谷 見慣れていたはずの街ががれきに埋もれてしまっていて、津波のすごさを知ると同時に、この町の暮らしが奪われたということが、ほんとうに悔しかった。

佐藤 鯨と海の科学館の周辺に集められていた廃棄物や残骸のあまりの量に驚きました。また、印象的だったことは、ほろほろになってしまった町の景色とは裏腹に「海がきれいだな」と感じたことです。皮肉なものだなって思いました。

芳賀 自分も同じように、津波の悲惨さと、港町・山田の目の前に広がっている山田湾の美しさを同時に感じました。

——海が美しかった……。皆さん同じ日の飛行だったのでしょうか？

芳賀 たぶん6月ごろだったと記憶しています。皆、半袖の作業服を着ていたような。自分の部署のパソコンで復命書を書いたことを覚えていますが、5月以降であったことは確かです。

鈴木 自分はまだあまり覚えていません。それよりも、早く戻って仕事をしたいって思っていました。新人でしたし、目の前のやらなければいけないことは山積みでしたので、ヘリで飛んでいるなんてそんな悠長なことをというか、大変なことはもう分

かつてるといいます。

菅野 自分は釜石市の出身なので、もともとそこに何があったのかなどは分らないで乗っていました。でも、あとで地図を見て、あったはずのものが消えていたり、小谷鳥地区の土地がえぐれたことを知り、ああ、やはり津波の威力はすごいものなのだと感じました。

阿部 海岸線や、ぐちゃぐちゃになってしまった堤防や岸壁などを上空から見ると、復旧・復興って本当にできるのかなと感じていたかもしれないですね。養殖いかだが消えてしまった海も、なんて殺風景なんだろうって感じました。

尾形 私の自宅は海からだいぶ離れていました。海は、役場の窓から毎日見慣れていたはずなのに、津波のあとの景色を改めて見たときは、海というものをなんだか認識しきれいなくなつたんだと感じました。小谷鳥地区の様子などは、やっぱり実際に行ってみたいと分からない。津波で家が流されるなんて考えたことのない地区に住んでいた私にとって、空からの景色は想像を超えていました。

——海がきれいだったというお話もありました。津波被害は凄惨だったけれど、それでも「海の十和田湖」とも呼ばれる山田湾を抱いたこのまちの「良さ」のようなものを見つげられた、見てよかったです感じられたことはありませんか？

鈴木 ヘリからの印象ではありませんが、養殖施設がなくなった海に、もう一度、養殖施設の黄



花火大会

佐藤 用地課に配属になつてからは被災者の方と直接やり取りする機会もありました。要望に応えきれないという歯がゆさも感じましたが、最善を目指してやってきたという自負はあります。

——うれしかったことなどはありますか？

甲斐谷 山田といえば秋祭りが大きなイベントです。県外からこのために帰って来られる方も多

い。その祭りが復活したときは、復興のひとつの象徴に思えてうれしかったですね。

齋藤 震災の年だったか、次の年だったか、ライトアップイベント実行委員会主催の花火大会を役場から見たことがあります。職員はみんな残業していたのですが、そのときはやはり少し手を休めて見えていました。すごくきれいだったことを覚えていて

鈴木 自分は、その花火大会の運営を手伝っています。

色い浮き球が浮かび始めたときは、やっぱりきれいだなと思いました。秋から冬になりかけていたころかな？ 海がきれいな季節でもあります。再び歩みはじめたという心強さも感じました。

——町の復興は、復興計画に沿って進められてきました。山田町の復興の手応えや印象はいかがでしょうか？

芳賀 他の市町村の数字と見比べると、やや遅れているような印象は少しあります。でも、役場の部署は足並みがそろっていると思います。



郷土愛が爆発する秋の大祭「山田祭り」

ました。ステージではカラオケ大会も開かれたのですが、出る人が少なく自分も歌いました。日常が少し戻ってきたかなという印象でした。歌った曲ですか？ 確かAKB48だったような。

阿部 JR山田線が三陸鉄道として復活した日は駅にいました。みんなが大漁旗をたくさん振って一番列車を歓迎している様子を見たときは、やっぱり山田はすごいと感じました。お祭りもそうですが、何よりもまちの人たちが一生懸命頑張ってきたんだなと思つて感激しました。うれしかったことは、もう……。たくさんさんあり過ぎます。

菅野 仮設住宅担当の部署に配属された時期もあります。そのとき町内には仮設住宅が1940戸もあったのですが、27年度以降は宅地造成や災害公営住宅も完成し、入居者がどんどん退去されて行きました。そして学校の校庭にあった仮設住宅が撤去されて元のグラウンドに戻って、子どもたちが駆けまわっている様子を見たときは、ああ、復興が進んでいるんだなという思いを抱きました。

尾形 自分の中でも三陸鉄道と三陸沿岸道路の開通は大きな出来事です。私は2番目の配属先が町民課でした。住民票を山田に置いたまま他県や他市町へ避難されている方も多くいらっしゃいました。うれしかったことではないのですが、印象的だったのは、お子さんがお住まいの関東地方へ避難されていた高齢女性の方が「山田はふるさと。人生の最後はやっぱり山田へ戻りたい。でも、関東で暮らすことになった」とお話をされたことでした。伺っていた私も、寂しさ、悔し



三鉄開通の日。ホームは多くの人であふれ、一列車を出迎えた

さ、やるせなさが入り交じったような気持ちでした。また、復興十年を目前にして台風19号に襲われたことも忘れられない出来事です。津波と台風と、どちらも被災されてしまった方もいらっしゃるのです、そういう意味では苦しい思い出です。

——感謝を伝えたい方はいらっしゃいますか？

佐藤 それはもうたくさんの方に伝えたいです。応援職員として山田町に派遣されていた方で、地元に戻られた後も、ふるさと納税をしてくだ

後日、同期の新人とともに震災対応を行った菅野さんに語ってもらいました。

——4月1日より前に役場へ集合し、役場職員として最初の仕事をしたときのことをお聞かせください。

菅野 当時は花巻市の自宅にいました。内陸でも混乱していてガソリンを給油するのに苦労した記憶があります。やっと給油ができて役場に來てからは防災無線で物資配布や炊き出しのお知らせなどを行いました。緊張はしていましたがとにかくかくの物資や炊き出しがきちんと必要な方に届くようにという思いで、放送するときの取り方や、声のトーンなどを調べながらやっていました。

——これからの山田町をこうしていきたい、魅力を発信したい、子どもたちに伝えたいことをお話しください。

菅野 月並みですが、震災から10年経とうと50年経とうと震災当時のことや復興に係る出来事を町として忘れてはいけないと思います。そしてそれは、あの時はあんなに大変で……と思い出話することだけではなく、今行なっている業務に昇華し次に来る災害に備えることで遺していきたいと思っています。未来のビジョンとしては地味かもしれませんが、いつでも町に住む方の命や生活を守ることを一番に考えた町でありたいです。

さつている方もたくさんおられます。山田を忘れないでいてくれるということに感謝ですし、うれしいです。

鈴木 九州のご出身で、派遣で山田町に來られた方の中に、町の職員になられた方もいます。

齋藤 ボランティアでやってきて、その後、山田町の職員になったという埼玉県の方もいます。また山田町は静岡県からたくさんの方の応援をいただいたのですが、静岡市役所には、山田に派遣で來られた方々で結成された「山田会」という集いがあります。



沿岸の市町村を結ぶ三沿道の開通効果の大きさは計り知れない

ていきたいです。海や山や自然はいっぱいあるし、

ここでしか見られないもの、できないことをもって教えてあげたいと思っています。また漁業の話すれば後継者不足という課題もあります。でも、将来、水産関係の仕事に従事するしないに関わらず、いつも心に海を感じてほしいです。

菅野 人口減少は、なかなか止めがたいことです。若い人が利便性やにぎわいを求めて都会へ出て行ってしまうのも仕方がないかなと。でも、山田祭りには多くの人たちが帰って來ます。やっぱり山田のことが好きなんですよ。対外的なまちのPRも必要だけど、町民が感じているこのまちの魅力を守つと守つて行きたいし、次世代にもしっかり根付かせたいと思っています。

阿部 大震災という出来事は、子どもたちにとってかきと伝え、同じ災害、同じ悲しみを繰り返さないということが何よりも大切です。そして山田町は、大津波被害から何度も立ち上がった復興してきた町なんだ、みんなで再生し、つくってきた町なんだということを教え伝えて、山田町を誇りに思ってもらえたらと願っています。

尾形 自然災害は防ぎようがありません。でも、災害に強い町をつくることはできます。防災を

——東日本大震災から10年が経とうとしています。これからの山田町をこうしていきたい、あるいは山田のこんな魅力を発信したい、子どもたちに伝えたいことなど「未来」についてお話しください。

齋藤 波静かな山田湾に浮かぶオランダ島は魅力のひとつだと思います。海水浴もできる無人島を抱えている自治体はなかなかありません。養殖いかだが浮かぶ湾の風景も、海産物なども、もっともっとPRして、より注目度の高い町にしていきたいと思っています。

甲斐谷 山田町だけのことではありませんが、子ども高齢化が進む中、子どもたちへの医療費無償化などは実現できているので、高齢者に対する行政サービスも、もっと充実させていけたら、もっともつといい町になるって思います。

佐藤 町は、全国からたくさんのご支援や応援を頂きました。それに対する恩返しとして、復興を遂げた姿を発信することも、頂いた支援のことも後世に伝えていきたいと思っています。

芳賀 人口が減少していることは大きな課題です。復興計画で目指してきたコンパクトなまちづくりと子育てしやすい町というのをしっかり実現したいと思っています。また三陸鉄道や三陸沿岸道路でつながった三陸地方全体で、交流人口や関係人口を呼び込めるようなプロモーション活動などもできたらいいなと思います。

鈴木 特別なことではありませんが、子どもたちが「山田町がふるさとでよかった」と思えるまちにしたいです。しっかりと固め、もしもまた大きな災害が起きてしまつても、被害は最小限に食い止め、町に住む人たちに頼られる町でなければいけないと思っています。

——東日本大震災が発生した翌月の4月、山田町の職員として採用されました。これまで、町の復興とともに歩んできた10年間、通常の仕事では得ることのない、業務や体験を経験してきました。

震災直後の混沌とした状況から、山田町が復興を成し遂げるまでのプロセスを、経験したことはかけがえのない財産となったことと思います。町の未来を担う確かな力を身に付け、貴重な経験を活かした姿を先輩職員に示し、町民に寄り添うことができる職員になつてほしいと思います。(石田)



菅野 麗奈さん

志望の動機
山田町は父の実家で毎年夏と冬に帰省しており、いい思い出がたくさんある山田町で働いて見たいと思った



全国から寄せられた応援メッセージは今も町の宝物だ



地域の「先生」から学び、タブレットにすぐ記録する



1 町内に残る4つの石碑を調査・撮影し、その教訓を学ぶ(船越地区)
2 三陸鉄道の列車に乗って、鉄道が受けた被害についても学んだ
3 地域のお年寄りからは、かつての津波体験なども伺った



クローズアップ
山田人 ⑦
Close-up YAMADA-JIN

県立山田高等学校の取り組み

津波碑に刻まれた「いのち」の大切さ 忘れかけられていた先人の教訓を

次代へとつないでいく高校生たちの活動

かつて郷土の先人たちが石碑に刻み残した大津波の脅威と教訓。その「碑」が語る意味は何か。そこから私たちは何を学び、何を伝えて行かなければいけないのか。高校生たちが紡いだ「いのちを守る約束と絆」。

▼岩手日報社の企画を学習材に

県立山田高等学校(以下、山田高校)では、令和元年(2019)、岩手日報社の連載企画「碑(いしづみ)の記憶」を学習材として、1年生31名による復興と防災学習の取り組みを行った。

これは、同校が同年に設定した「総合的な探究の時間」で、地域の災害史と防災について学ぶことを目的としてスタートしたもの。単元は、同年9月19日から10月25日までの17時間で実施された。

三陸地方には、明治29年(1896)の「明治三陸地震津波」や昭和8年(1933)の「昭和三陸地震津波」など、沿岸部を繰り返し襲った津波惨禍の

▼郷土を知り、先人の思いから学ぶ防災

山田高校がこの取り組みを実施した背景には、東日本大震災の発生から8年の経過によ

▼教訓を伝える新聞と石碑を紹介する地図を作成

授業初日は、岩手日報社報道部の太田代剛専任部長と、IBC岩手放送クロスメディア部の相原優一郎部長が、繰り返し襲ってきた過去の三陸大津波のことや、石碑に学ぶ災害史の意味など、企画の意図を説いた。

太田代専任部長は、明治、昭和、チリ地震の大津波が寄せてきた当時の様子を、新聞記事を使って解説しながら「碑は、何度も繰り返された津波の惨禍を後世に伝えようと建てられたもの。そこに込められた意味や思いを知ることが大事」と強調した。

また、仮想現実(VR)技術を活用した「碑の記憶」コンテンツの制作も行っているIBCの相原部長は「VRはデジタル時代の碑となる」と説明し、現代の技術が未来へ伝えるメディアとなることを解説した。

また、山田町に生まれ育った彼らだが、郷土の歴史や風土を正面から学ぶ機会は案外少なかった。彼らにとって震災からの8年は、自身の年齢の半分にあたり、その時間のなかで復興工事が進められ、町の姿はほとんど変わっていった。昨日までの通学路が今日には付け替えられて変わっていることもある。

自身が生まれ、育ってきた郷土の姿と暮らしの歴史を知り、防災への先人の思いや知見をどのように未来へつないでいくのか。生徒たちは、そのテーマに改めて向き合った。



石碑に刻まれた文字を読み取り現代の言葉に解説(船越地区)

復興事業が進む中でも、山田湾の風光や、湾を取り囲む山並みの景色はかつてのころと変わっていない。湾口から寄せた津波がどのように陸地へ乗り上げたのか、人々はどのように行動したのか。安全な場所とはどういうところか。想像を膨らませた。

また「碑の記憶」に登場した町民らへのインタビューも実施。田の浜地区では「昭和三陸地震津波」と昭和35年(1960)の「チリ地震津波」、そして「東日

YAMADA

復興の中の山田
私が見つめてきた
わたしの一枚



これからも碧い海とともに

発災から10年。小学校低学年だった子どもたちも高校生となり、自ら航路を拓いて行こうとする年代となった。
いつだって未来圏からの光を感じて生きている彼ら、彼女たち。
やがて翼は、ふるさとの海を渡る風を切って羽ばたく。
その風の中に見つけて写し撮った、みんなの夢、希望、青春の光――。



金石市鶴住居町「いのちをつなぐ未来館」で防災について学ぶ

▼ 私たちが語り部となつて 伝えていきたい

授業では、タブレットの活用のほか、「質問づくり(QFT)」の手法を活用した双方向型の学習を実施した。例えば語り部に対して「石碑をどのように活用していくのか?」「どのように未来へつなげていくのか?」「なぜ石碑で残したのか?」「石碑の教訓とは?」といった質問を準備する。
「質問づくり」とは、「多くの良い問いができる」とは、多くの良い探究と学びにつながる。生徒自身が、学習を自分のものとして取り戻す」との考えである。たくさん問うことでたくさんの答えが得られ、主体的・対話的で深い学びが得られるという手法だ。
そうした探究とフィールドワークを行いながら、



本大震災」の3度の津波を経験した中村トキさん(現在101歳)が経験を語ってくれた。
「昭和の津波の後、一度はみんな高台に移転した。けどいつの間にか低地へ戻ってしまっていた。命を守るための教訓を忘れてはいけない」と、生徒たちに語り、生徒たちは通信会社より貸与されたタブレット端末「iPad」で証言を記録。貴重な体験談に熱心に聞き入った。

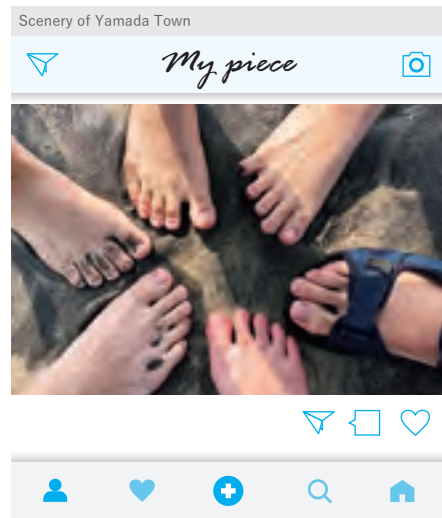
地域の地勢や災害の歴史に理解を深めた生徒たちは、学習の成果として新聞づくりを行い、また、町内の津波の石碑周辺のポイントを紹介するゲーグルマップを作成。そこには東日本大震災の際に避難した地点などが地図上に書き出されている。
そして10月29日、生徒たちは関係者や教員ら約50人が見守るなか、1カ月余りの間に町内に残る4カ所の石碑を巡り、そして地域住民らから学んだ歴史を基にまも上げた復興・防災教育の成果発表会を同校で開催した。

生徒4人で地区を巡った「記憶班」は、織笠地区に残る「明治三陸」「昭和三陸」の両大津波の石碑が忘れかけられている現状を指摘。碑に記された内容が、今では地域に伝わっていない現状を分析した。
「石碑は100年以上たっても読めなければならぬ。文字が風雨に汚されたり、文章表現が古くなったりしないよう、木製の碑にして定期的に更新したり、デジタル化するなどの工夫が必要だ」とまとめた。

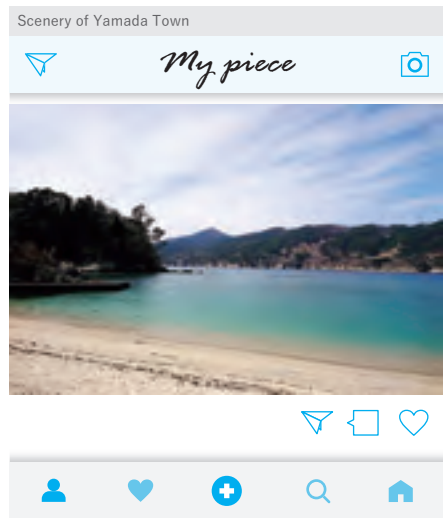
質疑応答では、「今後も道路整備などで石碑がなくなり、忘れられてしまうのではないか」という質問に対し「私たちのように石碑を学ぶ機会を増やし、大勢の記憶に残していく必要がある」「石碑を残すだけでは教訓は忘れられてしまう。私たちが語り部となつて伝えていきたい」と考えを語った。

先人たちが私たちに「伝えたかったこと」の真実に触れ、そしてまた次代へ「伝えていくこと」の大切さを学んだ生徒たち。
「もう同じ悲しみを繰り返さない。味わわせない」「命を守る教訓」のバトンが新たな世代へと渡された。

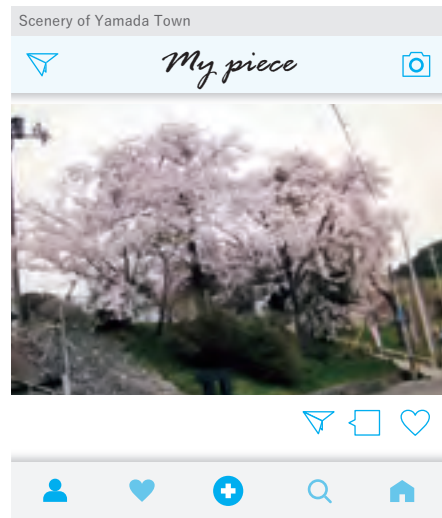
「命を守る教訓」のバトンが新たな世代へと渡された。



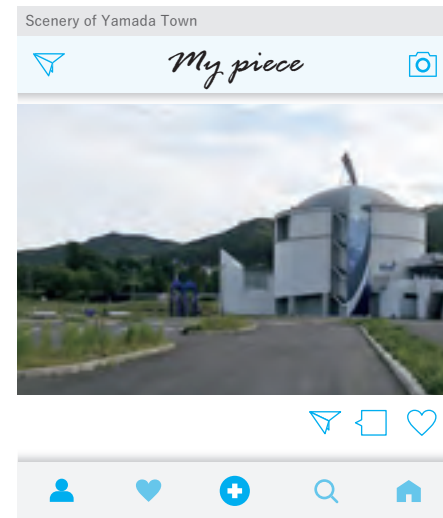
●田中 春樹(たなか はるき)
「ひと夏の青春」
海が怖かった。でも高2の夏部員全員で行った海は楽しくて高校生活いちばんの思い出。



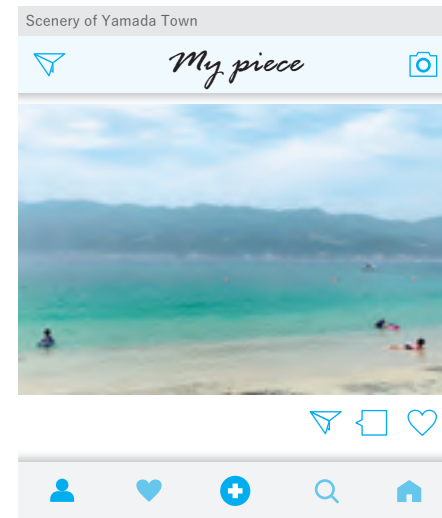
●渋梨子 大生(しぶなし だいき)
「きれいな海の怖さ」
この海が牙をむくとは。避難誘導して下さった校務員の田代先生は命の恩人です。



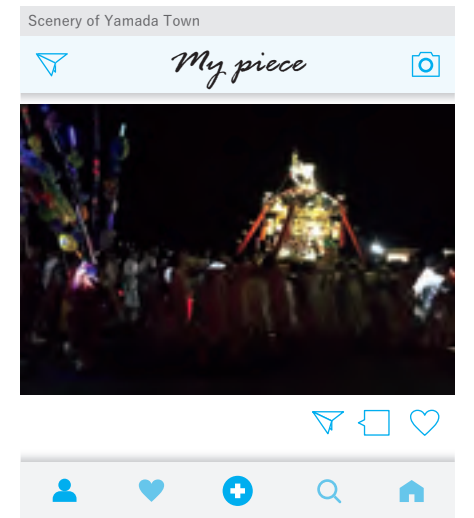
●佐々木 莉那(ささきりな)
「思い出の桜の木」
子ども時代を思い出す山田小前の桜。震災後の春も皆を明るい気持ちにしてくれました。



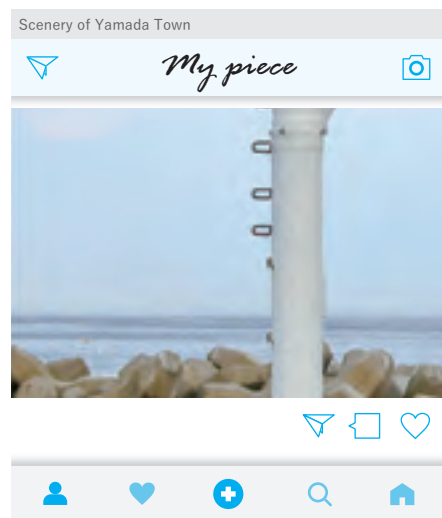
●小川 留以(おがわ るい)
「私と鯨と海の科学館」
鯨を通じて海と自然が学べる科学館。マッコウクジラの骨格標本は無事でした。



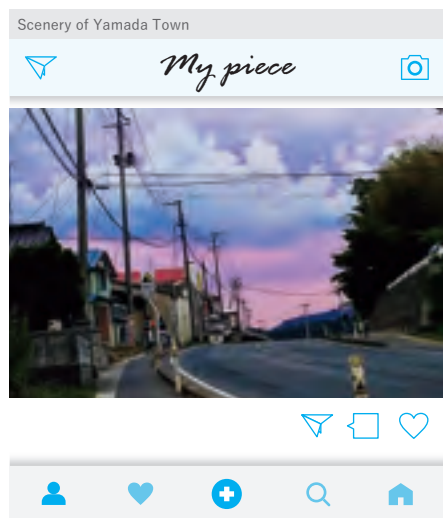
●尾形 ヒカル(おがた ひかる)
「やまだの海」
これからもきれいな山田の海がずっと続いていくといいです。



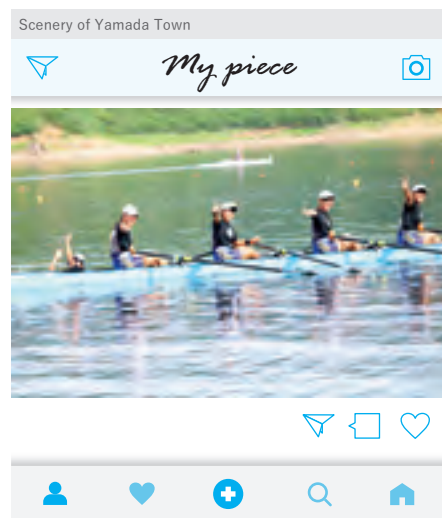
●内沢 水緒(うちざわ みお)
「山田の良いところ」
町民に元気を与えてくれる山田祭りが大好き。見どころ多い山田は魅力的。



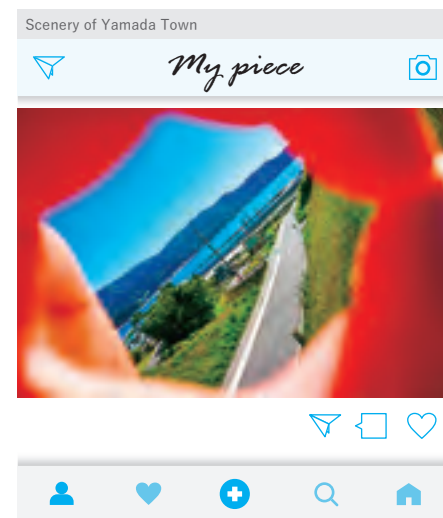
●西川 直哉(にしかわ なおや)
「思い出」
小さいころから海には思い出いっぱい。復興を^{おこ}兆した海が、一段と輝いています。



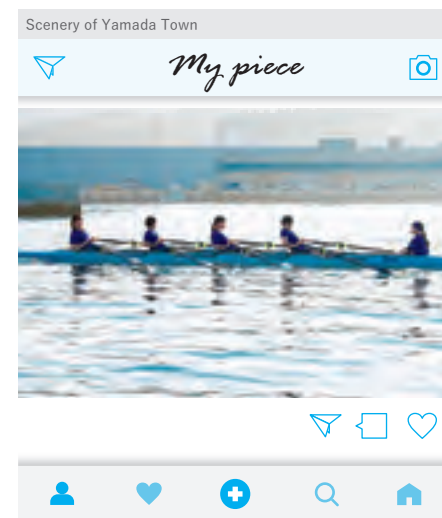
●鳥居 旭(とりい あさひ)
「10年」
一緒に苦難を乗り越えてきた仲間。一緒に部活。もうすぐ終わるとなると少し寂しいです。



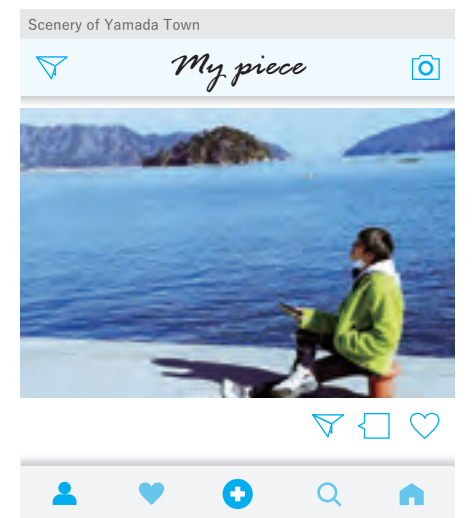
●鳥居 亜紀(とりい あき)
「阿吽の呼吸」
ボート競技で夢だったインターハイにも出場。先生、地域の人々、山田湾に感謝です。



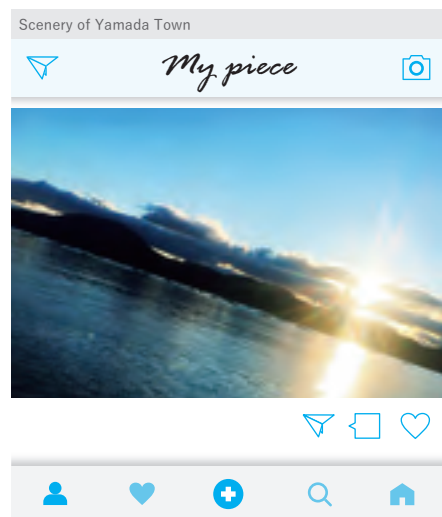
●川野 愛美(かわの あみ)
「山田の全部」
たまに通る通学路の景色。踏切と海と山。どこかのアニメのワンシーンのよう。



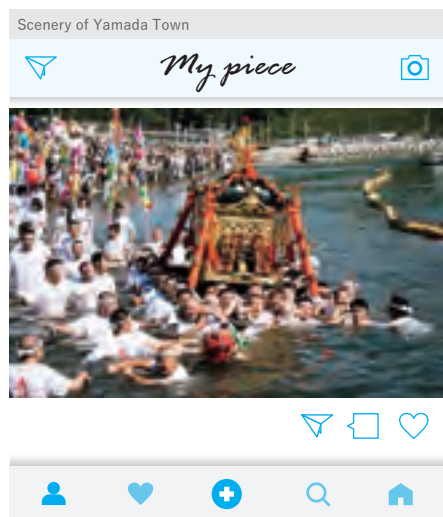
●甲斐谷 こいき(かいたに こいき)
「海」
山高ではボート部でした。山田のきれいな海で部活動ができて良かったです。



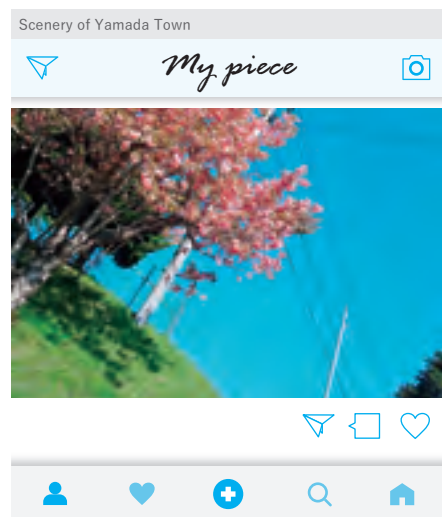
●小野 堅斗(おの けんと)
「美しい山田の海」
何度見ても山田の海はきれいだなぁって思う。他県の人にも一度は見て欲しい。



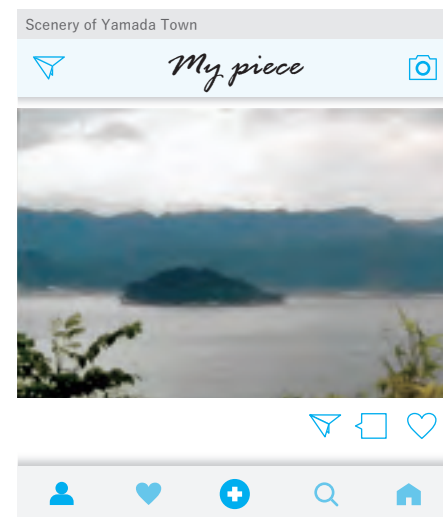
●福浦 真穂(ふくら まほ)
「山田の海」
中学の美術の授業で撮った「光」の写真。ずっと変わらず静かできれいな海でいてほしいな。



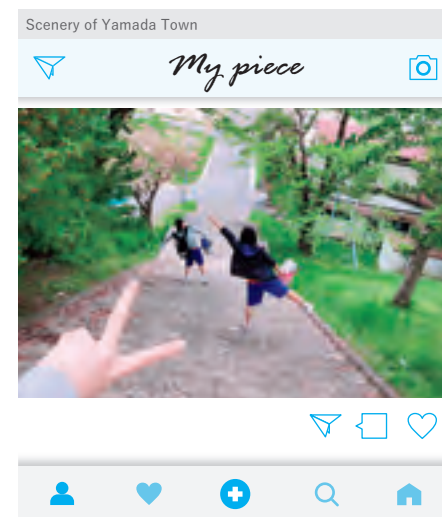
●沼崎 響(ぬまざき きょう)
「山田町のお祭り」
様々な思い出いっぱいの山田の祭り。復興して、この祭りもずっと盛り上げていきたい。



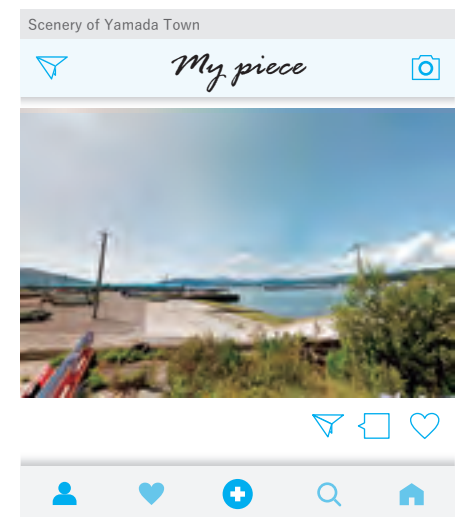
●西村 美海(にしむら みみ)
「桜」
毎春、小学校の階段に咲く桜が好きでした。これからこの桜に見守られていきたい。



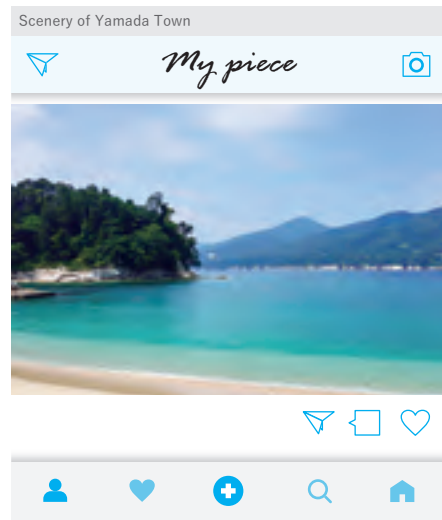
●佐々木 唯斗(ささき ゆいと)
「祖母との思い出の場所」
震災後、大浦の祖母と海を見ながらたくさんお話しました。思い出の場所です。



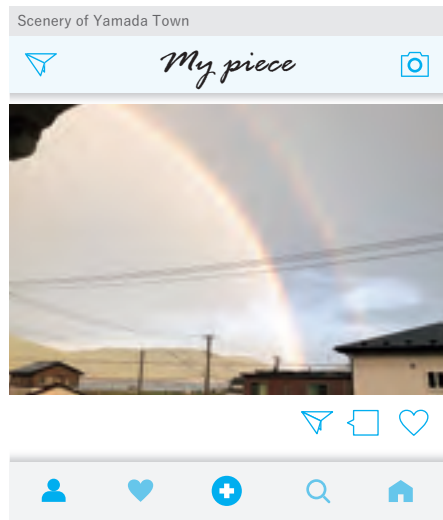
●佐々木 未衣菜(ささき みいな)
「思い出の階段」
母校・織笠小の階段。桜散る春、皆で遊んだ階段は私の大切な思い出の場所。



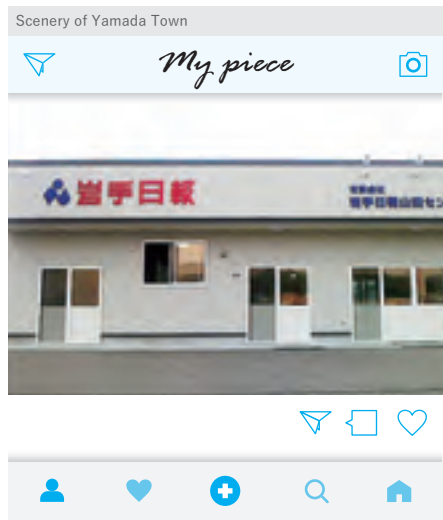
●佐々木 修登(ささき なおと)
「大沢の海」
久しぶりの海で思うこと。あの震災を皆で乗り越えて今があることに感謝したい。



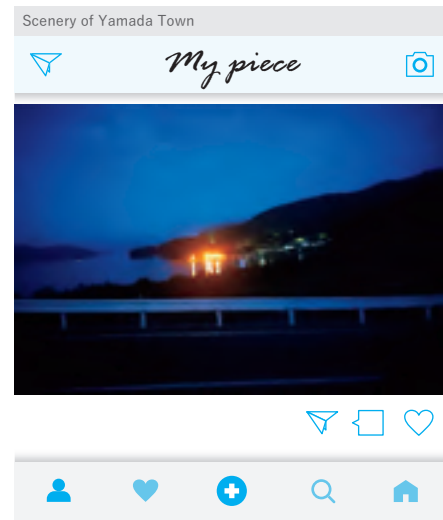
●小林 未空(こばやし みく)
「山田の今」
震災後、幼いころ暮らしていた山田に戻ってきて驚いたけれど、活気が戻ってきて嬉しく思います。



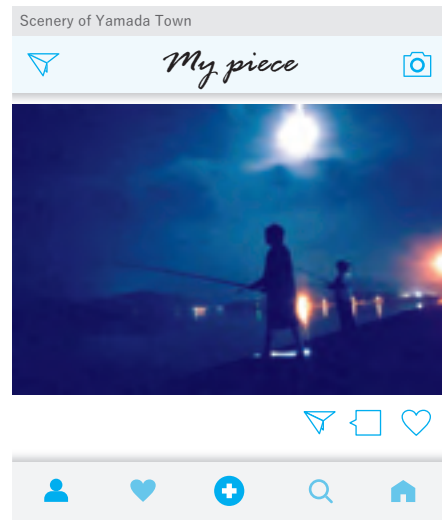
●熊谷 恵利(くまがい えり)
「未来を照らす二つの虹」
「卒業」「祝福」の意味を持つ二重の虹。仮設から新しい自宅へ移ったある日、見かけました。



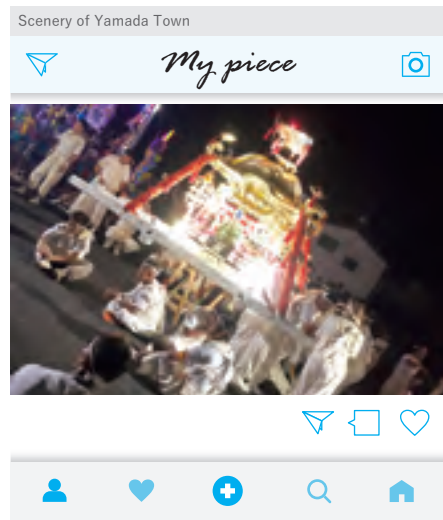
●梶山 直人(かじやま なおと)
「新店舗」
震災で流された新聞屋さん新店舗に。みんな頑張っているという思いを表す一枚です。



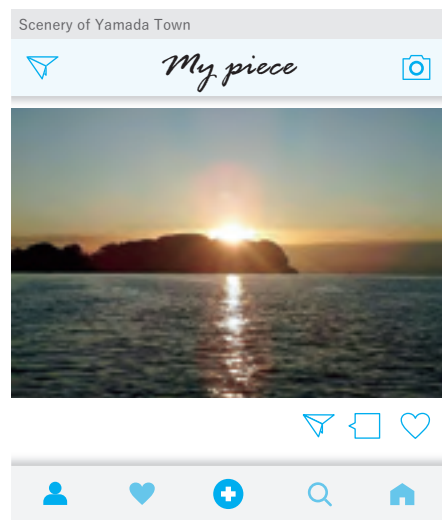
●山口 南斗(やまぐち なんと)
「復興と願い」
あの日の光景は頭から離れないけれど、復興に尽力された方々には感謝しかありません。



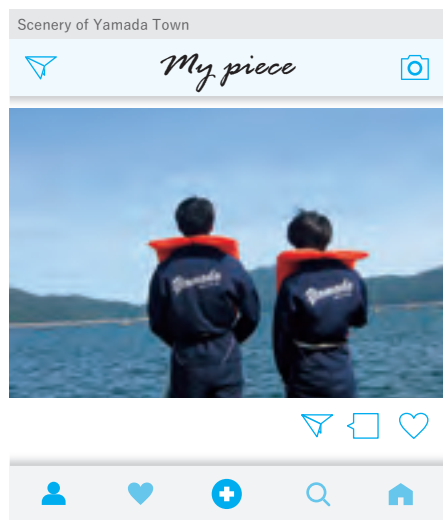
●山内 博仁(やまうち ひろと)
「静かな海ときれいな月」
耳にはさざなみの音だけ。目には月と星空だけ。そんな落ち着いた山田町の岸壁に家族と夜釣りへ行った時の一枚。



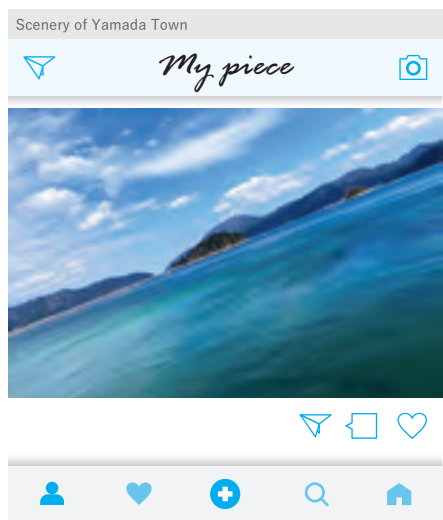
●松崎 寧緒(まつざき ねお)
「山田の楽しいイベント」
みんなが山田祭りで笑顔になってほしい。これからも町を秋祭りで盛り上げてほしいな。



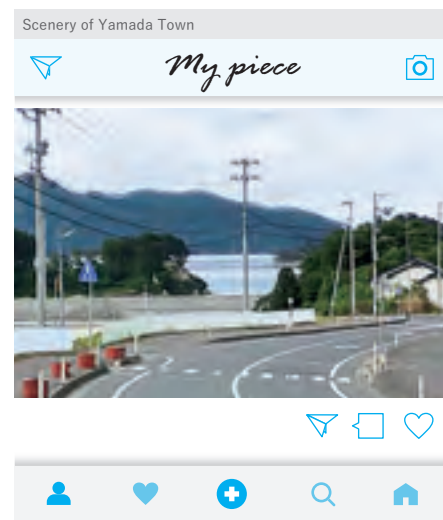
●佐々木 友花(ささき ともか)
「船越の海」
よく釣りをしていた船越の海。津波はショックだったけれど海は今でもきれいで大好き。



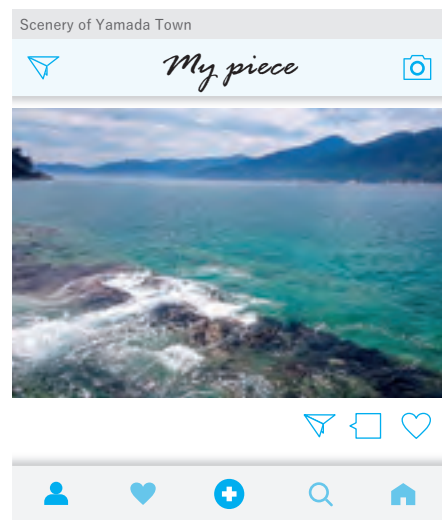
●佐々木 駿(ささき しゅん)
「忠次郎さんの孫と」
大好きな忠次郎さんの孫と2ショット。



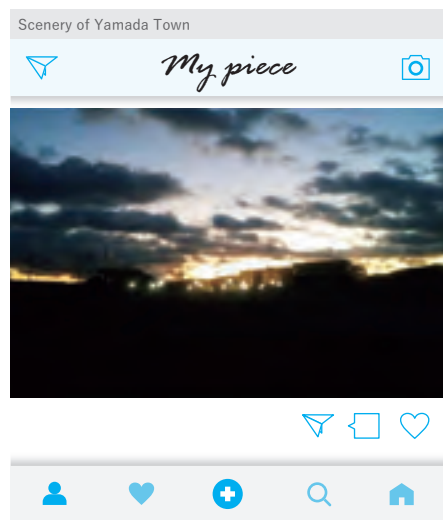
●斎藤 優菜(さいとう ゆうな)
「東日本大震災からの復興」
海が私たちが襲った大震災。まだ元の山田ではないけれど、あふれる活気に復興を感じます。



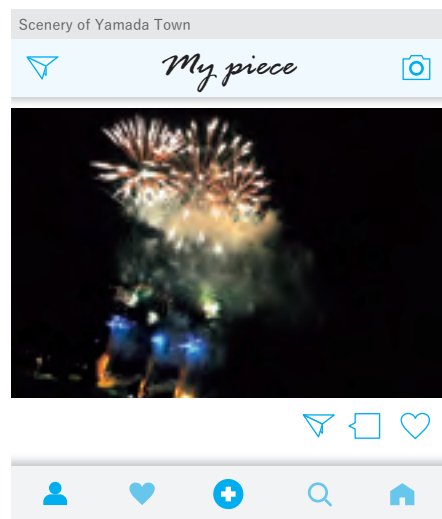
●小原 慎ノ介(おばらしんのすけ)
「私と海と山田」
学校からの帰路に見る山田湾の風景と海風と、ときどき出会う猫の姿に癒やされています。



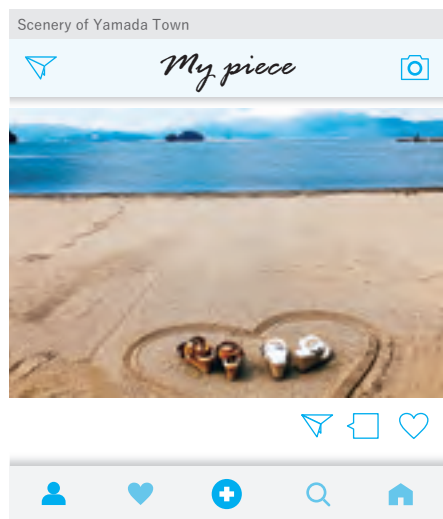
●山崎 理沙(やまざき りさ)
「山田の海」
山田の海は心穏やかになる。ずっときれいな海であるように私にできることを頑張りたい。



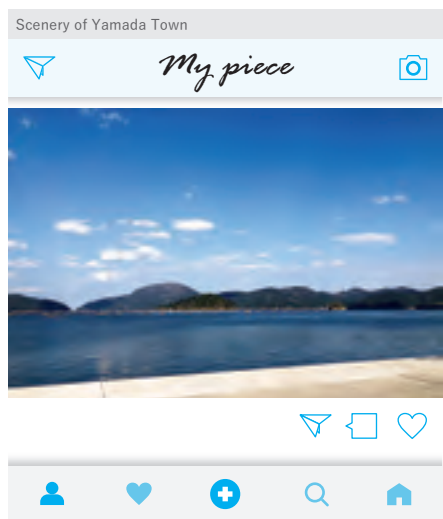
●山崎 北斗(やまざき ほくと)
「輝く山田町」
輝く復興住宅の上の空。こんなふうに山田町は輝き前へ進んでいくんだなあと思います。



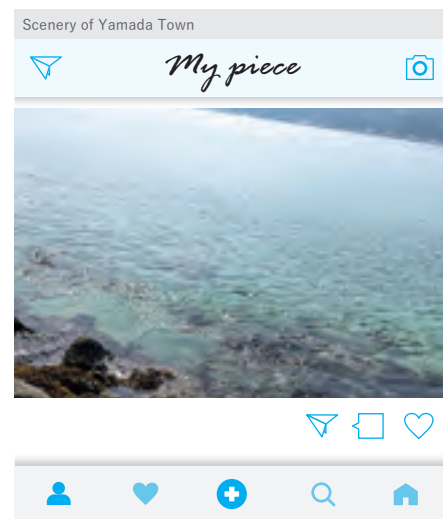
●佐々木 美羽(ささき みう)
「夏を感じた」
夏休みのバイトのあとに見た花火。夏の疲れなんて忘れてしまうほどきれいな花火でした。



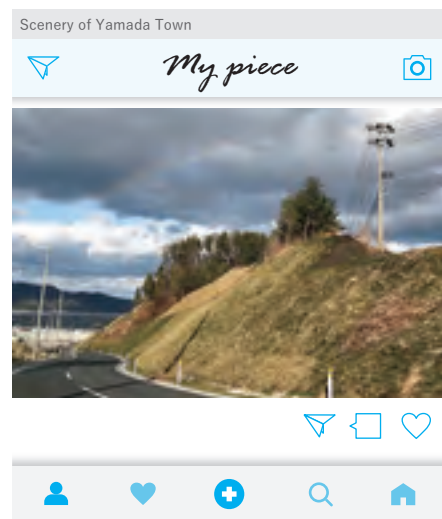
●佐々木 麻里(ささき まり)
「海と共に」
山田町は自然に恵まれた町。これからもみんなが海と共に歩み、光り輝く町であってほしい。



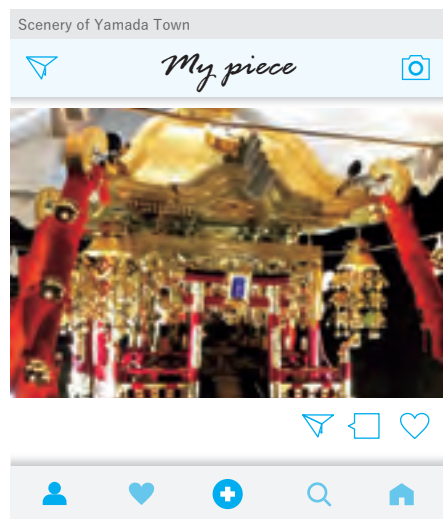
●佐々木 永愛(ささきのぶあき)
「綺麗な山田湾」
復興も進み、山田湾もきれいになり町もにぎやかになった。もうあんな災害がないことを祈ります。



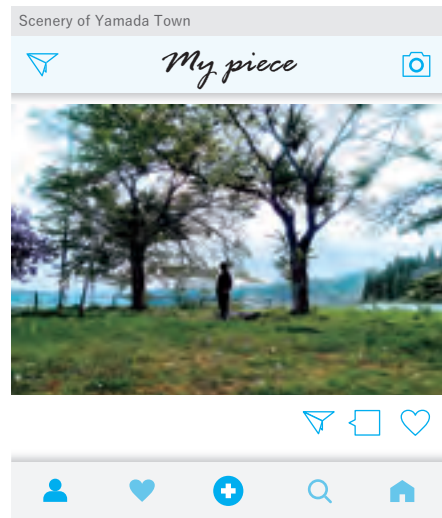
●山崎 レミ(やまざき れみ)
「山田の綺麗な海」
きれいな海に戻った荒神海水浴場。透き通った海で友だちと遊ぶのが毎夏の恒例です。



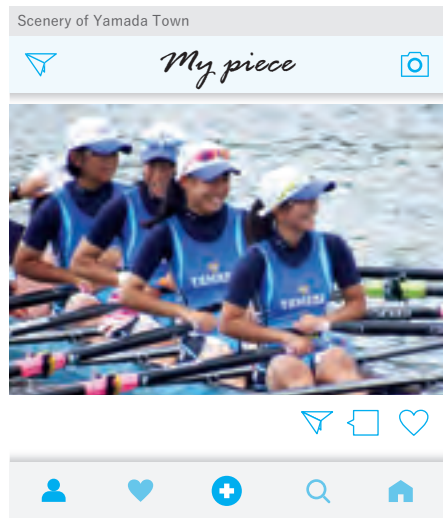
●板橋 みなみ(いたばし みなみ)
「虹が見えました」
放課後、部活で艇庫に行く途中に見えた虹。町の未来も雨上がりのように輝いてほしい。



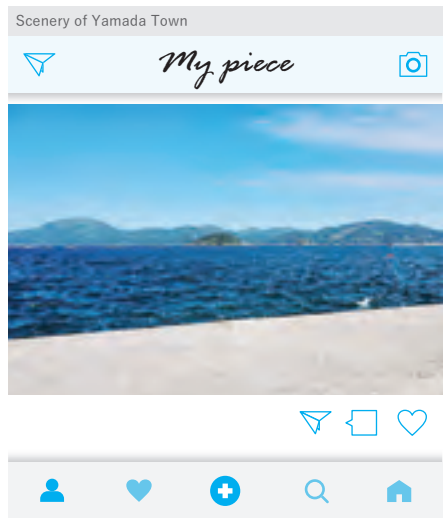
●横田 理紗(よこた りさ)
「大好きな山田祭り」
山田祭りににぎわいに町の良さを感じます。たとえ町を離れても祭りにはきっと帰って来たい。



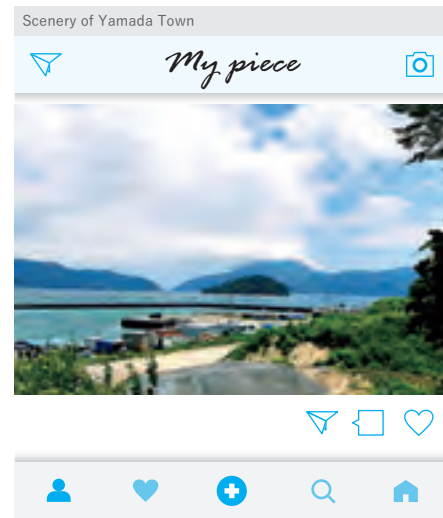
●道又 凜(みちまた りん)
「大沢にて」
自撮り写真。何気ない日常も復興に携わってきた人々の力があってこそ。感謝を忘れず生きていきたい。



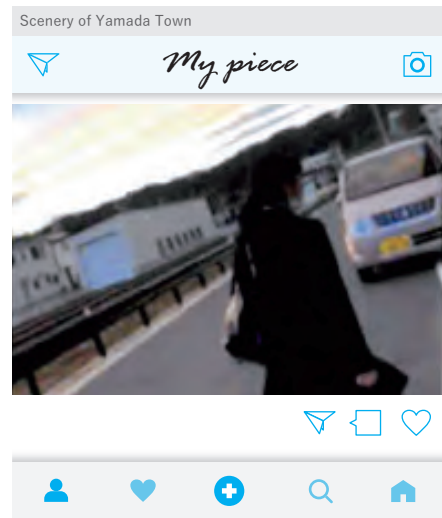
●堀合 明香莉(ほりあい あかり)
「山田湾は私達の輝く青春の1ページ」
attention go! 加速する艇。仲間と夢を追いかけた山田の海は忘れられない青春の1ページだ。



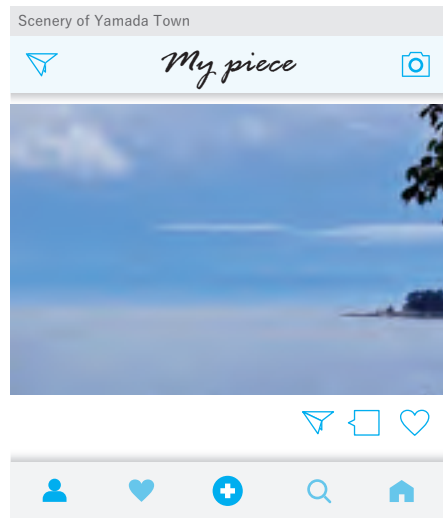
●武藤 さやか(ぶとう さやか)
「オランダ島と海水浴」
小さい頃オランダ島で家族と海水浴を楽しんだ。町には活気が戻りつつあり、また島にもいけるかな。



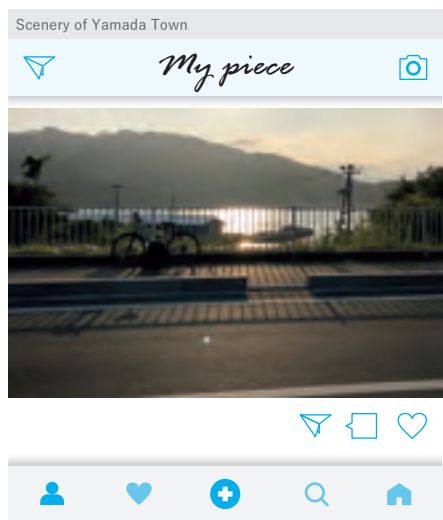
●佐藤 摩南(さとう まな)
「海が知らせる町の景色」
黒い波に奪われた町。でも今では山田の海もみんなの笑顔も輝いていると感じています。



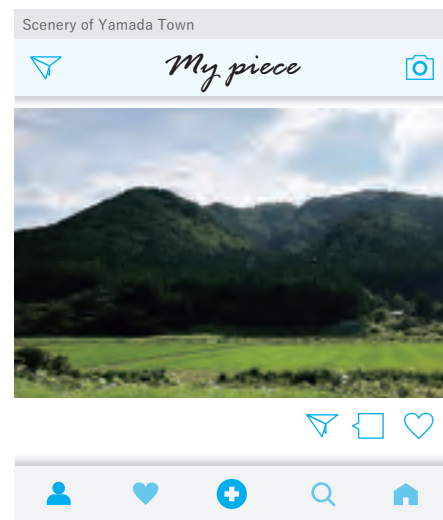
●佐々木 結花(ささき ゆか)
「私の友人」
山高に入学してであったいちばんの友人。大切な友人とたくさん思い出をつくりたい。



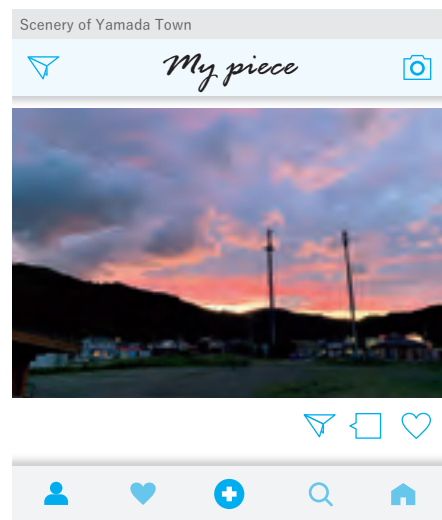
●佐々木 優依(ささき ゆい)
「私が好きだった場所」
閉店してしまったレストランの窓から。この海を見ながらの食事は私の大事な思い出です。



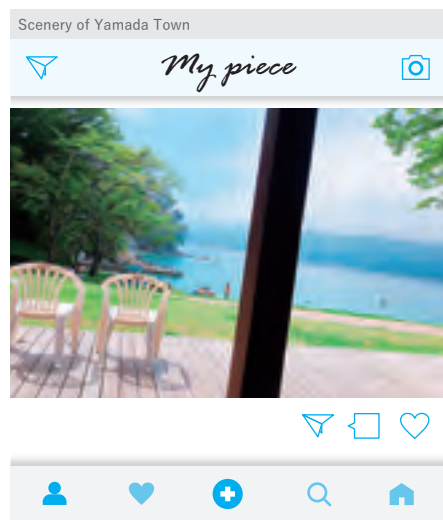
●山崎 賢斗(やまざき けんとう)
「私の住む町」
自転車通学の毎日。帰り道の夕日は癒しです。卒業して町を離れてもこの景色は忘れません。



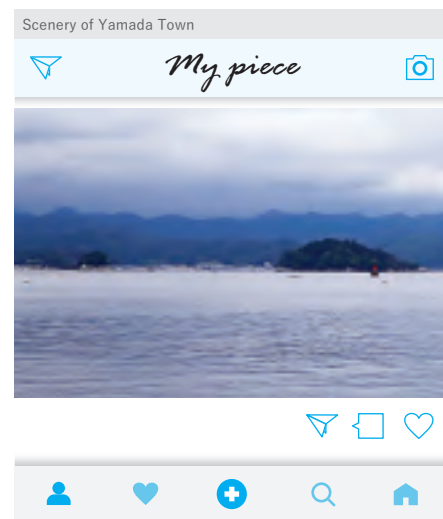
●関口 諒(せきぐち りょう)
「初夏」
津波のあと漁船が横たわっていた田んぼ。風に育つ元気な稲穂のように町も復興を遂げてほしい。



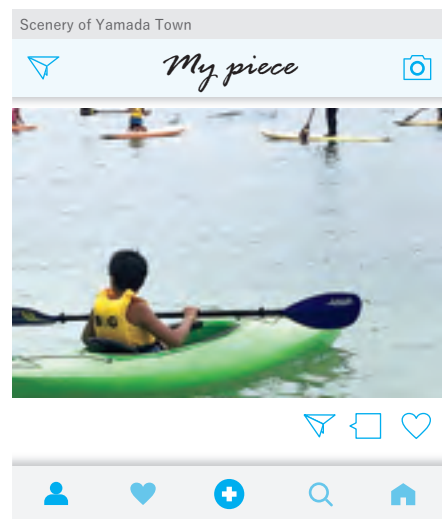
●鈴木 陸翔(すずき りくと)
「家から見える空」
部活後の帰路、大沢のきれいな夕空。懐かしさもあるし改めていい場所だなと思う。



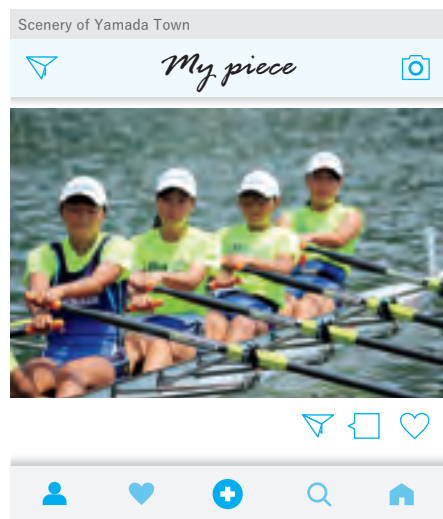
●沢田 里奈(さわだ りな)
「普通の生活」
部活のあと海で遊ぶのが好き。山田の海はみんなと私の大切な思い出の場所。ずっとここにいたい。



●橋田 隆輝(はしだ りゅうぎ)
「大浦から山田をみて」
大浦から見る山田の自然は穏やか。みんなが大切にしている山田に感謝を忘れず過ごしたい。



●中山 那菜歩(なかやま ななほ)
「マリンスポーツの思い出」
弟の子供会で行ったオランダ島。透明な海でした。また行きたいし多くの人に行ってほしい。



●鳥居 亜美(とりい あみ)
「霞露」
私たち山高ボート部が苦楽を共にした大切な海。私を成長させてくれた山田湾が大好き!

とっしへ行っても
山田祭りには きっと帰ってくる

震災があっても、
やっぱり海はきれい。
大好き♡

この町が
もっと居心地が良い場所になるために
私も頑張る。

「部活で頑張れたのは 仲間のおかげ」。

私の青春の場こそが山田湾」



クローズアップ
山田人 ⑧
Close-up YAMADA-JIN

カキやホタテがどのように育てられているのかが学べる「養殖いかだ見学」

やまだワンダフル体験ビューロー 体験観光で「山田らしさ」を発信 地元住民と訪問者の交流機会の拡大から 地域活性化をめざす山田町の戦略

山田では、恵まれた自然景観と豊かな山海の幸を強くPRしながら、多彩な観光政策をスタートさせている。移住者であるコーディネーターと行政と住民が創造する「山田らしい、山田ならではの」プログラムで、まちづくりの仲間の獲得を目指す。

山田町を知ってもらう 機会の創出

東日本太平洋沿岸の市町村では人口の減少が続いている。

震災から9年目の令和2年（2020）2月1日の人口統計によると、青森県から茨城県までの太平洋沿岸地方39市町村の中で前年より人口減少率が改善したのは11市町村にとどまり、20市町村で減少率が拡大している。

人口の減少、住民の高齢化は、地方自治体にとって地域づくりの担い手が不足するという課題を生む。

地域に暮らす人が減ることで農地では耕作が放棄されて草叢のゾーンが広がり、住民のいなくなった家屋は傷み、地区のにぎわいも消え、町全体の生産活動や消費行動も薄れ、地域の活力が失われていく。

一方では、若者を中心に、人材が地方へ入り始めるという傾向も見られる。人と地域の関わりは、近年「交流人口」「関係人口」「定住人口」という言葉で言い表される。

「交流人口」は、通勤や通学、買い物、観光、レジャーなどを目的として地域へやってくる人だ。

「関係人口」は、例えば観光が契機となって

一年間のヒアリングで 課題を見つける

「私は、宮城県在住の友人が東日本大震災で被災したことと、また仕事関係のつながりで、震災直後から2年間ぐらい、東北と東京を行ったり来たりしていました」

山田町復興コーディネーターの第一回目の募集に応募し、現在「やまだワンダフル体験ビューロー」の体験観光コーディネーターとして働く服部真理さんは、被災地との関わりをそう話す。もともとは東京の出身だ。

「復興コーディネーターの説明会が都内であったとき、お話を聞きに行ったのです。被災地で役に立っていることがあればと思ってダメもとで応募したのですが、採用していただきました」

山田町へやってきたのは震災から3年目の平成26年（2014）だった。コーディネーターの任期は5年である。

町役場に顔を出すと、当時の水産商工課長は「復興業務のための人材補給ではありません。この町でやることを考え、探し出してほしい」と言った。作業員ではない。復興の次のステージで町が展開する事業を創り出すことが使命だ。

「まず、町や人のことを知らなければ」ということで、最初の一年間はできるだけ多くの人と会い、ヒアリングを重ねました。たくさんの人と仲良くなっていく中で、町や人が抱えている課題が見えてきました。なりわいの再生、交流人口の拡

大、農水産品の加工や販路拡大……。それらの課題に解決策を見つけていくのが仕事でした」

▼ **まずは交流人口の獲得が先決**

町は、環境省が平成20年（2008）から普及と推進と定着を目指して事業をスタートさせた「エコツーリズム」に手を挙げていた。

エコツーリズムとは、地域の自然環境や歴史文化など、固有の魅力を観光客に伝えること

地域や地域の人々と関係を結び、何度も足を運びながらより深くかわつてくれる人という。過去に勤務や居住の経験がある、親類やルーツが地域内にあるという人もこれに含まれる。

そして「定住人口」は、文字通り地域に住んでいる人だ。もともとの居住者はもちろん「交流」から生まれた「関係」が発展して地域に移住して「定住者」となることもある。

例えば被災地ボランティアでやってきた人が地域の人々と交流を重ねる中で、その街や人を好きになり、継続的に交流を深めているケースも少なくない。

被災地に限らず、今、地方では交流を増やし、関係を深めてもらおうという様々な施策や試みが行われている。

本町でも「移住定住コーディネーター」や「空き家バンク」といった事業を展開し、町の生活環境を確かめてもらうための数日間のお試し滞在も実施している。

入り口となるのは、まず山田町を知ってもらうこと。

その施策のひとつとして、平成25年（2013）、町では山田町復興コーディネーター（やまだ復興応援隊）という外部からの人材募集を開始した。

まちに活気を創り出す人がたくさん訪れ、まちの人々が明るく元気に安心して暮らしていくための復興事業のひとつだった。



毎春開催される「山田カキまつり」



浦の浜海水浴場でのシーカヤック体験

で、その価値や大切さが理解され、保全と地域活性につなげていくことを目指す仕組みだ。町にあるものを活用し、多彩な地域資源を観光客に伝え、地域住民もまたその価値を再認識することで、地域ならではの観光のオリジナリティを高めようというもの。

服部さんはこのテーマを持って、町の人たちの集まりや勉強会に顔を出した。かつての「陸中海岸国立公園」は「三陸復興国立公園」と名称を変えていた。山田町は、ほぼ真ん中にある。海の景観はもちろん四季の海産物など観光資源となり得るものは多い。

「でも、宿泊施設やアクティビティなど受け皿になるものがありませんでした。単なる通過型の観光地になってしまう。どうしよう?…?というところで考え付いたのが『体験型観光』でした」

▼山田町で「体験できること」を探る

町の魅力と可能性を、いま一度探し出した。まず海がある。しかも三陸地方では珍しく波穏やかで、いくつもの養殖いかだと町のシンボル・大島（オランダ島）と小島が浮かぶ景観から海の十和田湖とも言われる「山田湾」と、断崖絶壁や岩礁に荒波が碎けるダイナミックな風景が広がる「船越湾」という趣を違えるふたつの湾に面している。海岸性原生自然の景観は学術的にも価値が高い。

山田湾ではシーカヤック、漁船クルーズ、オ

と観光推進への意欲をかきだし、行政と民間連携による体験観光推進の重要性を地域として共有していった。「体験プログラムなどは揃いきっていませんでしたが、まずは『目に見えるものをつくらう』ということで、折りたたみ式パンフレットを作成したのです」

シーカヤックや新生やまだ商店街協同組合の震災語り部ガイド、白石集落ごっとな会のそば打ち体験、マリン・ツーリズム山田の漁業体験、カキ・ホタテ養殖体験、グリーンハートやまだ、いわき農園によるいろいろ野菜数種の摘み取り体験など、初期段階にあったプログラムを掲載し、まず「知ってもらうことから始めました（服部さん）」

▼楽しい震災ガイドで山田ファンを獲得

新生やまだ商店街協同組合の「震災語り部ガイド」は平成25年（2013）から活動している町で唯一の語り部グループだ。メンバーは組合員で、飲食店、時計店、写真館、消防団長、タクシー会社社長など男性4名、女性3名がいる。

そのガイドの一人で、組合事務局長の椎屋百代さんは立ち上げの経緯を「語り部がいなかったのもともと中心街でご商売をされていた方々がそれぞれの体験を語り伝えていこうと結成しました」と語る。



椎屋 百代さん

びはん株式会社勤務。新生やまだ商店街協同組合の「震災語り部ガイド」も務める

「3つのコースがあつて、時間は1時間から1時間半ぐらい。『震災語り部まち歩き』では中心街を歩きながらガイドします。『復興まち歩きつまみ食いツアー』では、まち歩きをしながら山田ならではの味覚を2〜3種類つまみ食いします。これがいちばん人気です。また、『語り部タクシー』では、中心街以外の場所も訪ねます。いずれもタブレットをお渡しして、町の昔の姿も疑似体験していただきながらご案内します」

震災語り部ガイドがスタートしたころは、まだ震災の傷痕も「見えていた」が、復興が進む中、昔の様子などは伝えにくくなったという。「でも、今を見て、今を知ってもらえたらと思います。だから『つまみ食い』などで、まちの復興の様子を明るく捉えていただけたらいいなど。他の市町村の語り部さんは、少し重たいお話が多いようですが、山田の場合は軽く聞いて思っています（笑）」

見ていただきたいのは復興した山田の姿です。「だからウェルカムです」と椎屋さん。「山田はおいしい、楽しい、また来よう。そんな山田ファンになっていただけたらうれしいです」

ランダ島上陸、養殖いかだ見学、漁業体験などのプログラムの体験が可能だ。また、船越湾には「三陸一透明度が高い」と言われる荒神海水浴場や、船越半島には山と海の魅力を同時に訪ねられる遊歩道もある。

里山には多彩な農林産物があり、それらの収穫体験や加工品の手づくり体験もできる。街では震災語り部とともに街歩きをしながら味覚を楽しむこともできる。



服部 真理さん

東京都出身。2014年「山田町復興コーディネーター」に採用され「体験観光コーディネーター」として活動中

▼体験観光の考え方を地域で共有

町は、平成28年（2016）、観光協会や商工会員などをメンバーとする「山田町体験観光推進協議会」を立ち上げた。

アドバイザーを招き、業者をはじめ町内の幅広い業種や層に向けて講演会を開催。観光への関心や興味を引き出し、具体的なプラン創出



タブレットを持って震災語り部が案内する

▼山田観光の受け入れを一本化

「語り部さんも含めて、体験プログラムの受け入れは、ほとんどをビューローが受け付けています」と服部さん。

また、事業者の収入を守ることも大事な仕事だ。

「団体旅行などではディスプレイを申し入れられる場合もあります。でも、例えば漁師さんは、本業の手を休めて受け入れるわけですよね。『お金なんていいよ』なんて言ってくれる方もいますが、しっかり線引きをすることも『体験観光』を長く続けていく上では大切なこと。受け入れ側にも責任感が出ます」

プログラムの入れ替えなども常に考えているという。復興が進めば街も変わる。時代も変われば体験に使える新しいツールなども出てくる。観光客のニーズも、受け入れ側にも変化することも変化する。

▼「マリン・ツーリズム山田」がJTB賞を受賞

「やまだワンダフル体験ビューロー」のこれまでの体制づくり活動は、山田町という町の知名度とともに次第に全国的に知られていった。服部さんには、これから体験観光を始めたい、という他の町からの講演依頼なども舞い込むという。

高い評価も得られた。令和2年（2020）1



山田エコツーリズムの舞台のひとつ、オランダ島



授賞式で登壇した服部さんとマリン・ツーリズム山田のメンバー

月、JTBが主催する「観光振興に対する斬新な取り組み」を表彰する『JTB交流創造賞』の組織・団体部門で、最優秀賞を受賞した。

「マリン・ツーリズム山田」は、平成17年（2005）に山田湾の漁師たちが「子どもたちに養殖漁業を体験してもらいたい」として結成したものだ。震災を境に活動を中止していたが、養殖漁場などハード面での復興が進んだ平成28年（2016）、体験ビューローなどと協力して復活した。養殖いかだ見学やオランダ島上陸といったプログラムは好評を博し、申込者も年々増えている。

▼未来を見据えた観光創造を

三陸鉄道リアス線が復活し、三陸沿岸道路も通じた。交通インフラの整備が進む中で、宿泊施設が少ない山田町に立ち寄ってもらうための

町では平成30年度から専任コーディネーターを配置して、移住・定住の個別相談を受け付けている。町のホームページでは、町内の空き家を紹介する「空き家バンク」というサイトも開設、また平成31年度からは、県の移住支援金活用やリフォームのための補助事業も制定し、事業の推進を図っている。

町では、令和2年度から個別相談や首都圏で開催される移住相談会などへもブース出展し、本町に興味を持った人を対象に「移住お試し住宅」という手頃な価格での滞在可能な住宅を提供し、試行的に滞在してもらいながら山田町を知ってもらう事業も開始している。

首都圏での移住相談会は、岩手県主催のものばかりではなく、さまざまな公共・民間の団体が主催しているものも多い。ただし、令和2年には新型コロナウイルスが流行した関係から、町へ人を呼び込むことが困難な状況にある。首都圏での移住相談会の開催に関しては、周辺市町村とも連絡を取り合い、同年度の参加は断念した。

▼移住促進は、一緒にまちを創る「仲間探し」

町の取り組みは3年目だが「相談数は増えている」と担当者。令和2年度はコロナ禍の事情もあり、オンライン相談へと切り替えた。相談者は若い女性が多く、次いで仕事をリタイアしたシニア世代の男性などだ。本来であれば「移住お試し住宅」へ誘い、生活環境なども確かめ

魅力がなければ「通過型」になってしまう、と服部さん。

「まちの人口は減り続け、地域経済は力を失っていく。まちに人が来てお金を落としてもらおうというシステムはつくって行かなければなりません。『ウイズ・コロナ』と言われるこの先、どうやって人を集めようか？ ひとつの転換点です。観光という事業は開始してから実を結ぶまで3年と言われています。でも、10年がひとサイクル。未来の町の姿から逆算したビジョンを、行政や町の皆さんと一緒に作りあげていきたい」

動画での情報発信や、オンラインで産品を買ってもらうなど、今できることは続ける。先を見越して立ちどまることはない、と服部さん。また、来以降はオランダ島をどう活用するかも検討中だ。キャンプができるかどうかの実証実験も行っている。

▼もっひとつの施策展開「移住定住」

現在、町が取り組みを開始している定住人口の獲得に向けた施策にも触れておきたい。

地方の若者が都会を目指す一方、地方への移住を考える若者、または定年後の暮らしの時間を地方で持ちたいという人たちも一定数いる。地方移住への関心は年々高まっている。そうした中、地方自治体でも、専門の窓口を設置したり、専任のコーディネーターを採用するなどして対応に当たっている。

ってもらう方向でいたが、現在は関係人口にとどまっている状況だ。

就職相談や住居といった個別のケースについての回答は、まだ整備の余地はあるというが、例えば県の「移住支援金事業」では、移住者が「移住支援金事業」に登録してある企業に就職した場合に最大100万円を支給するといった制度もあり、これを活用した移住者もいる。企業および空き家の登録数を今後増やしていきたい方針だ。

「コロナ禍の昨今、山田町へ帰りたい」というUターン希望者もいる。今後、テレワークなどが働き方のひとつのスタンダードとなれば、地方移住は選択肢となり得る。

ダブルライフ・ダブルワーカー——ふたつの違ったまちに住み、ふたつの違う仕事をするという、そういう生き方を模索する人も増えている。地方へ移住するという仕組みや仕方を、それぞれの地域らしく創り出すことで、地方移住を考えている人の背中を押すことができる。

移住定住は、高齢化対策、人口流出へのカウンターという視点もあるが、一緒に地域をつくっていく仲間になってほしいという、人材探し、仲間探しという意味合いもある。

より満足度が高く、より注目されるような、山田町らしい移住定住への取り組みを継続していく方針である。



荒れ地に立つコスモス

震災前、母の介護の合間に息抜きによく行っていた船越公園が震災後、荒れ果てて何もなくなってしまった風景はとてもショックでした。

でも、ある日、雑草の中にコスモスがすっと立って真っ直ぐに太陽の光に向かって花を咲かせているのを見つけました。

大丈夫だよー 大丈夫だよー 負けないよー ここにいるよー

と応援してくれているように感じました。

花たちはたくましく上を向いて輝いていて勇気をもらいました。

きくち 菊池 まゆみ (山田町後楽町 50代)

撮影日 2011年10月18日

場 所 船越公園